

ら行四段の活

といへるに就きて辨難してん 〔ら行四段の活中〕有り居り」の二詞はおの／＼一種單獨に活く格なるを本居春庭氏は曾てそこに心づかれずして「降る去る釣る入る」などの詞と等し並みに見すゞし全く同格のやうに心得ひがめて

有り 居り

の二詞をたゞのら行四段活格の中に混收して活を定められき といはまたしきわざにていみじきひがことなり

氏は然ばかりなる語學の大家にて語法の一大基礎を啓發せられしかど 何か奥義原理までには考へ及ばれざりしにやいとく口をし 後に清水濱臣氏出で唱へけらく

「有る 居る 侍る 來たる

の類この處の活用なれども受くる詞のとは第二音よりよきを受くる例なり」と といはみじき卓見と謂ふべし 爾來氏が啓發せし説により 語學家なべて

ら行四段一格

としてたゞのら行四段活の格を區別することにはなりぬ すべて語學書辭彙別記などにもら行四段一格として説き示せり 然はわれき「有り居り」の二詞を同格のものに見なして混收せり といはまた動詞活用基格の遺奥學理をさめざるものことし 何となれば

ら行四段一格の活用基格中

有り

の詞は四段活格の第四音すなはちえ列「け」けてへめれ」の語尾から續きて(上二段活下二段活などの如く「れ」)「往けら往けり往ける往けれ」とやうに合はせ活く性質を有せる格なるがそが

ら行一格

の同格に活くべき

居り

の詞のみは四段活格と同じく第四音を例の「れ」の語尾から續きて

居れら 居れり 居れる 居れ

とやうに合はせ活くべき格なり(有り在りの詞は素より同じ詞より同じ詞に合はせ活くべき理の無きは論までもなし)とはその語尾の變化における活用格のみこそ同格にはわれ詞の成立および性質に於ては

有り(在り)

の詞と

居り

の詞とは全く異なるものなるをもて四段活格の並に

ら行一格有り

に合はせ活くべき格を定むべきなり その理由何となれば上一段活下二段活などの如く語尾に「るれ」の添はらずして四段活格の種類に屬する格なるのみならず動詞の種類別けの上より論ずるも「居り」は存在動詞の範圍中の詞なれどもその性質は作用動詞に至りて近き詞なり ゆゑに「有り在り」

の詞とは甚だ種類を多異にせる性質の詞なるを以てなり。とも聖臣が創唱にて千古未發の一新啓
發なれば疑訝をいだく人も定めて有るべし。されど語法上の學理より論究し興義を推しきはむる
きは斯く斷定せざるを得ざるなり。なほその例証を古典に徴せん。

古今集四秋歌の上に 題しらす 僧正 遍昭

名に愛で居れるばかりぞ女郎花

「吾落ちにき」と人に語るな

とあり。然るに古本に第二の句を「をれるばかりぞ」と假字がきにて傳はりしを先哲古學家なべて皆
「折れる」意に釋きひがめたりしに、よりの歌の意靴へだて、痒きを搔かんがごとく誰もく心ゆくは
かりには説き得ざりしなり。そは畢竟「居りて」ふ詞はら行一格の活用のものなれば同格の「有り」の
詞をその第四音の語尾に續けて合はせ活くべき格なるものと曾て思ひ得ざりしゆゑの誤りにこそ
この歌の意「居れるばかりぞ」と謂ふ意にせざれば第四の句の「吾落ちにき」と言ふ意に義理打合は
ざるなり。何とすればこの歌古今集の序に「嵯峨野にて馬より落ちてよめる」とあるを以て考ふるに
女郎花を婦女によそへて名に愛でよといひ馬より落ちたるをその愛戀の情におぼれまどひて吾が
心の墮落せし意味にたはひれてよめるにて、その女郎花のにはひの美しさに暫時見とれておぼえず
たし時間をうつしてそこに打眺め居れるさまに言ひなせるなり。さるを加茂真淵翁本居宣長翁始め
先哲古學家の註釋せし如く「折れる」意にするときはあながちにその女郎花を吾がものとなして手折
りて携へゆく意になるをもて僧官の高きに位せる遍昭が品行の上に對して然よむべくもあらざるこ
とは更に論ふまでも無きことなり。その花に手はふれずしてよそながらたし打眺め居れるばかりぞ
といふ意味に釋かざればこの歌の意はかなはぬなり。第四の句の「落ちにき」といふに意義打合はぬ
なり。かいなでの國文家いふかるなかれ。かいなでの語學家あやしむなかれ。されば

有り在りも居りも動詞活用の格は共に

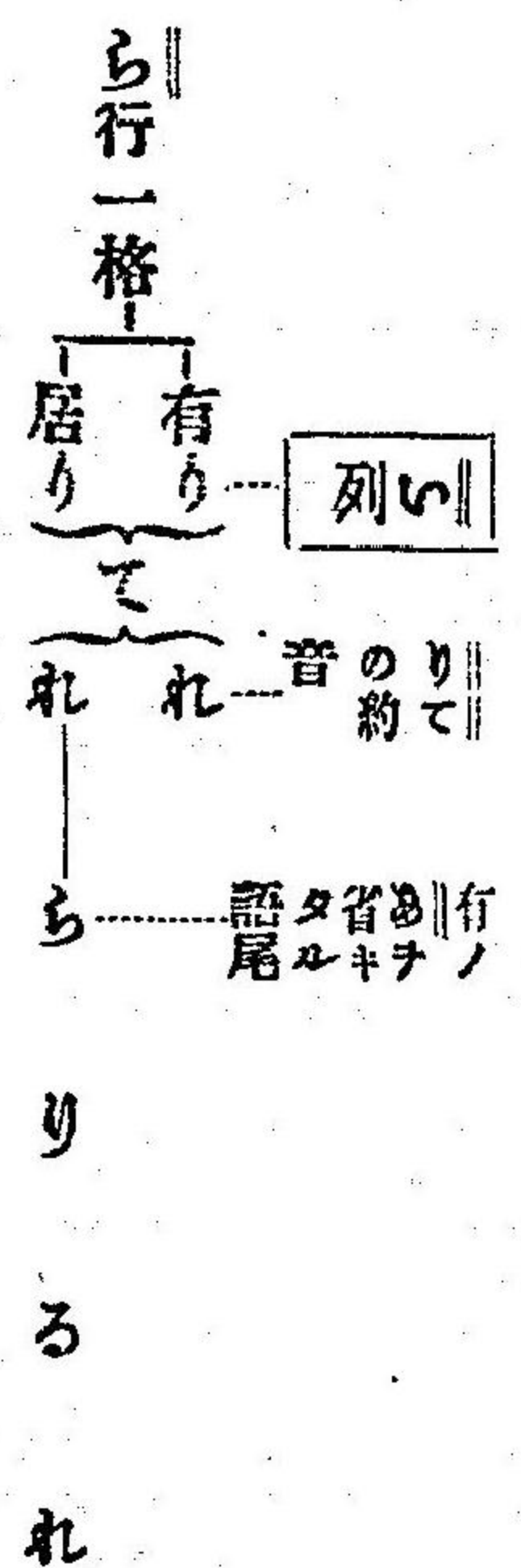
ら行一格

されど同格の「有り」に合はせ活く關係を多異すればこれが活用圖式を製する上においてはいやや
無く圖式を二様にせざるを得ず。ゆゑに

ら行一格「有り」

ら行一格「居り」

の二種に分類せるを穩當とす。その圖式左のごとし



本居春庭氏著詞の通路をはじめ諸語學家の誤を批難す

林 麩 臣

動詞活用の上は自他の性ある學理を啓發せられしは本居宣長翁のまなご本居春庭氏なり。この學理
を發見して詞の通路を世に公行せられしは實に本居春庭氏の大功といふべし。わが國語學の道のひ
じりとして本居宣長翁につぎてたへつべし。たふとむべし。活語上に自他の性をけざやかに辨知
せまば句をかまへ章をなすに意味混錯してその義通せず。その用をなすあたはざるものとす。され

ば文かき歌よむ者深くこれに注意して明確にあらめふかまほじきものぞ 然はあれどこれが義理を感ふよし無くつばらかに辨せんことはいと難しともかたきわとなりかし そはその學理高遠精微にして言語哲學のさかひに近くや、語原學の範圍に涉ればなり はやう本居春庭氏がこの學理を古典に徴してわいためられしこそみじき卓見にはありけれ されどいまだその蘊奥のきはみまで考へのおよばれざりしにや ざるは詞の通路に「自他の詞六つにわかれたれば」とありてそれを類別するに左の表圖のごとく

おのづから然る
みづから然る
物を然る
他に然る
他に然る
おのづから然せらるゝ
他に然せらるゝ

の七種とし その中に「おのづから然る」と「みづから然る」を一つにこめて六段に次第し

二上カ	二下ヤ	みづから然る	物を然る	他に	おのづから	他に
ナ	カ	みづから然る	物を然る	然る	然せらるゝ	然せらるゝ
イ	ユ	みづから然る	物を然る	然る	然せらるゝ	然せらるゝ
ル	ル	みづから然る	物を然る	然る	然せらるゝ	然せらるゝ
四サ	一上マ	す	す	す	す	す
イ	カ	す	す	す	す	す
イ	ル	す	す	す	す	す
二下サ	二下サ	す	す	す	す	す
二下サ	二下サ	す	す	す	す	す
二下ラ	二下ラ	す	す	す	す	す
二下ラ	二下ラ	す	す	す	す	す

斯くのごとく「おのづから然る」と「みづから然る」を一つにこめて分類せられしはいまだしき考へといふべし ばた綱を目ををさへ打混じて論辨せられしはひがごとあり いとくちをし されどおよそ著述は始より完全なるもの出来らへきものにあらざるは和漢洋ともに今古著作家の普通の言としてゆるすところなればあへておとくへきにあらず かばかりに學理を啓發せられしは實に敬服にたへざるなり その苦學おもふべし

また語彙別記といへる書には詞の通路の説をこれかれ取捨して四等に分ち

おのづから然る 一
みづから然る 二
物を然る 三
他に然せざる 四
おのづから然せらるゝ 五
他に然せらるゝ 六

「他に然る」の一種を省き捨て、新たに説を立て、左の表圖のごとく断定せしむべし

一	おのづから然る
二	みづから然る
三	物を然る

これを然る詞といふ
これを然る詞といふ

等三	他に然せざる	これを然せざる詞をさす
四	おのづから然せざる	これを然せざる詞をさす
等	他に然せざる	

斯く類別して

「他に然する」の一種を省き捨てたりしは、よく心得がたし。詞の通路に

「他に然する」をさす一種を立てし分類せしこそかへりて至りふかき考へにはありけれ。また横山由清氏は活語自他捷覽といへる書にこの大別を

自然言

爲然言

合然言

被然言

「自然言」を細別して

おのづからしかる

みづからしかる

「四種とし、更にその

の二種とし

「爲然言」を細別して

物をしかする

他にしかする

の二種とし

「合然言」を細別して

物をしかせしめる

他よりしからしむる

の二種とし

「被然言」を細別して

みづからしかせらるゝ

他よりしかせらるゝ

の二種とし、すべてを九種とせり。この横山由清氏が説はやく精しきに似てはあれど綱目入りみたり條理秩然ならず。然のみならず、あらぬ名目ともをいたづらに設けおしたるものごとし。委しくは下の比較の條にいふべし。また佐藤誠實氏は語學指南といへる書に

自言
他言

使言
被言

の四種とせり これも學理をいまだ會得せざる説なり
また物集高見氏は初學日本文典といへる書に

能動活辭

受動活辭

自動活辭

役動活辭

被役動活辭

の五種とせり これも矢張學理をいまだ究め得ざる説なり 綱と目を混錯し 動詞法と動詞性と
のわいたりある學理の奧義は知らぬものと見ゆ 語學の力はまだし 委しくは下の比較の條にいふ
べし

また大和田建樹氏は和文典に

自動詞

他動詞

被然言

自然言

の四種とせり これらのごときは素より論ずるに足らず 語法の學理に至りては無下に辨知し得ざ
るなり 腹かへて笑ふべし 委しくは下の比較の條にいふべし

すべて、はゞ多まるゝが中に殊に甚しきは落合直文氏らが著の中等日本文典あり 是は動詞の性格に
おける自他の辨別の條を脱ける左の如し

「用言自他格

すべての用言とその性質上よりわかちて、左の三種とす

第一 然る詞

第二 然する詞

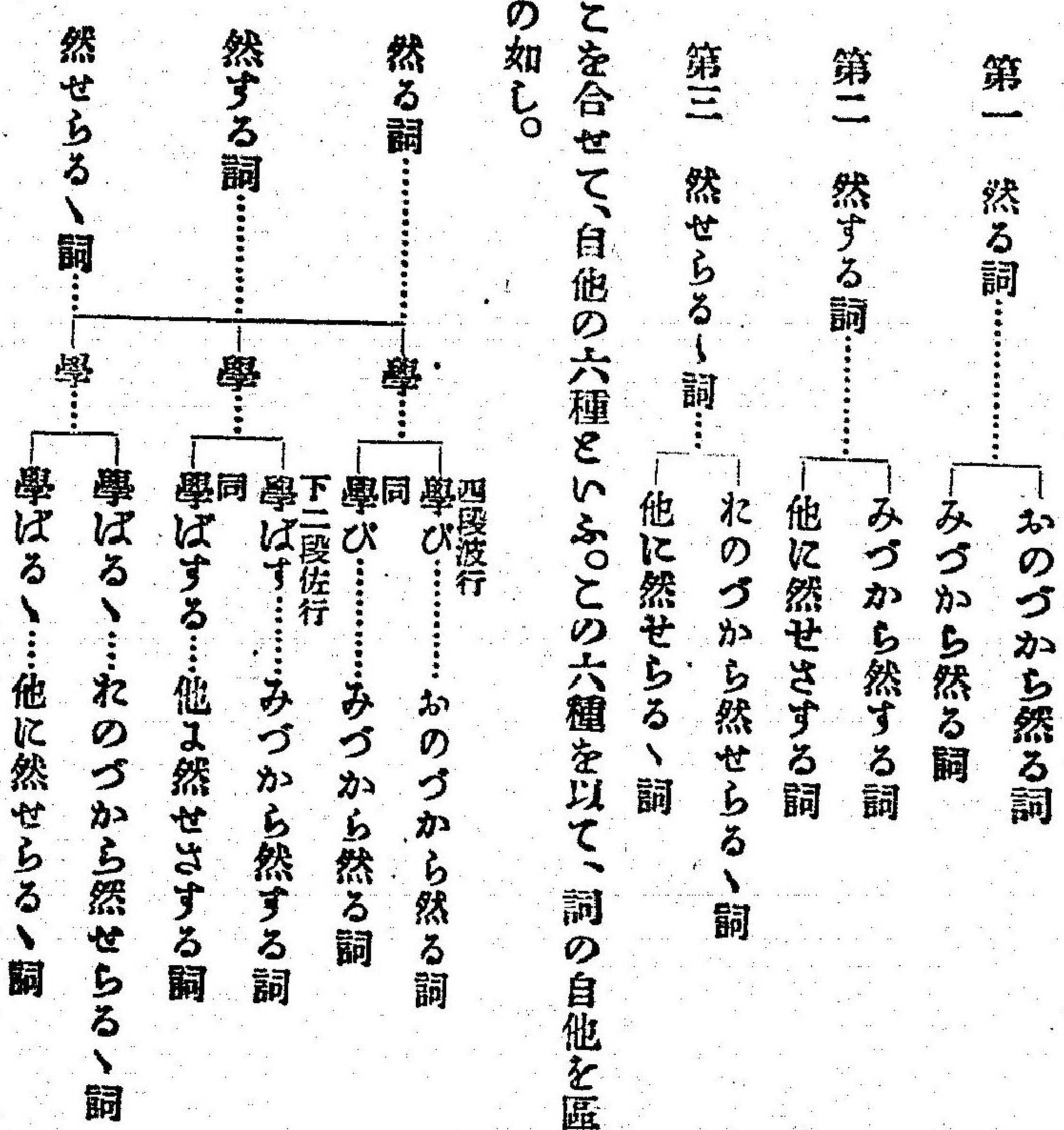
第三 然せらるゝ詞

第一、然る詞に、またれのづから然る詞と、みづから然る詞との、二種あり。れのづから然る詞とは
例へば、みゆる、きこゆるなどのごとく、己が目耳にみゆる、きこゆるにて自然を主としていふ詞な
り。みづから然る詞とは、例へば、みる、きくのごとく、己がみる、きくにて、己を主としていふ詞なり。

第二、然する詞も、また二種あり。みづから然する詞と、他に然せざる詞となり。みづから然する
詞とは、例へば、さかする、みするなどのごとく、己が書畫、又は談話を、他にみする、さかするにて、己
を主としていふ詞なり。他に然せざる詞とは、例へば、みする、さかするなどのごとく、他に景色、
又は音樂を、みする、さかするにて、他を主としていふ詞なり。

第三、然せらるゝ詞にも、れのづから然せらるゝ詞と、他に然せらるゝ詞との、二種あり。あのづか
ら然せらるゝ詞とは、例へば、みらるゝ、さかるゝなどのごとく、書のみらるゝ、琴の音のさかるゝに
て、自然を主としていふ詞なり。他に然せらるゝ詞とは、例へば、己が書畫を、他にみらるゝ、己が琴の

音を、他よきかゝるゝ等と、他を主としてゝるゝ詞あり。今以上を圖にあらはせば、左の如し。



右は、四段の活の、學ぶといふ詞の、三種にうつり、れよび六種にわかるゝを示せるなり。」

と言へり 腹抱へも、せらるばかりあされて、いとかはゆしをこがまじきも、餘りも有るか 動詞
 活性の自他辨別の格は全く知らざるものと見ゆ その淺學一目して知られたり 國語學に力無きは、
 言ふにも足らず 同氏が文典は、後進學生を感はすの、ひがふみなるを斷言す 道のため措き難し
 ゆるし難し いで、その然る理由を批難してん 先づ第一よその自他格の分類を

然る詞
 然する詞
 然せらるゝ詞

の三種に斷定せし事より辨へん 落合直文氏は そもくゝいかなる考へありてか斯く分類しつる
 餘りあり 笑ふべし 自他格辨別中もつとも肝要なるべき性格の
 然せざる詞
 然する詞

の中に籠めて細別とせり 國語學に力無きも餘りなり 落合直文氏は、「然する詞」と「然せざる
 詞」とは全く同性同格の詞と斷定しをること知られたり ことば、いみじきひがことなり 何とされば
 「然する詞」は

自性詞

の範囲内に属せる詞にて「自身然爲る」活性のものを謂ひ、「然せざる詞」は

令性格

の詞にて「他人に然令する」活性のものを謂ひて、「然する詞」の方は、「物を口のみづから爲る」こと
に「らひ」然せざる詞の方は、「物を他人よ言ひつけて令しむる」ことら「ら」格にて全く活性を異
にするものなればあり
さて、その例語を掲げて

然する詞……學……
四段佐行 學ばず……みづから然する詞
下二段佐行 學ばする……他に然せざる詞

とやうよ示せり 落合直文氏は「自他格の由りて別かるゝ原理原則を知らざるがゆゑに斯く抱腹
絶倒すべき説きことばするあり 全く語學は知らざるなり

そも「動詞活性の自他別別は、畢竟動詞活用上の成立ちに基づきそれが性格の因て別かるゝもの
にして、動詞の活用基法中「四段上下二段一格」ともの如く單活性の限りのものを

自性格

となし、その單活性の活格より「行下二段活の」令せ「また」行下二段活の「令り」を合はせ活く複活性
のものを

令性格

となし、またそれら「行下二段活の」被れに合はせ活く複活性のものを

被性格

と定むるを原則とす 然らざれば學理は立たざるなり されが學理を據るときは、同氏が掲げ示せる

學ばず は 自性格にて
コレガ細目ノ支配自性ナリ
ユエニニ行四段活格ナリ

決して「然する詞」の中よその「學ばず」と「學ばする」を混収すべきものには非ざるあり 何となれ
ば

學ばず は 「學ば爲」の義

學ばする は 「學ば令る」の義

にて詞の成立ちを異よしその語原、全く別なり 落合直文氏は、その語原その原理の何たるをも知
らす その意味その活性の何たるをも解し得ざるなるべし 同氏は學ばずの「す」も學ばするの「す
る」も共に「令する」義のみ思ひひがめてをれりを見ゆ そは、同書九十九頁より百六頁までの間

用言活例

の條に「四段活中佐行に活くべき詞

いかす 令活 いそがす 令急

うかす 合浮 うつろはす 合移
 ねくらす 令後 ねどろかす 令驚
 からす 令枯 かよはす 令通
 などの如くすべて「令何々々」とやうなもの、また下二段活中佐行に活くべき詞をも同じ様

くはする 令食 たわまする 令撓
 とらする 令取 にははする 令句
 までの如く「自身爲る」活性の詞と「他人に令する」活性の詞との差別をたに辨知し得ざるものと見ゆ
 漢學も、また沙汰の限りといふべし 一行四段活格あるこの類の活性の詞はすべて「人よ言ひつけ
 て合じむる」には、あらすして「みづからが物を爲る」意の詞あれば

いかす は 爲活 いそがす は 爲急
 うかす は 爲浮 うつろはす は 爲移
 ねくらす は 爲後 おどろかす は 爲驚
 からす は 爲枯 かよはす は 爲通

の字義を知るべし
 次に第二、然る詞なる細別の日ならびに例語を掲げて

四段波行
 然る詞……學……
 同 學び……みづから然る詞

とやうよ、とて示せり これまた、をかし 然る詞なる細目の一つ「たのづから然る詞」の例語を

學び

とせるは、らか々「學び」といふ詞に「たのづから然る詞」よわらず「物を然する詞」にて、すなはち「物
 を支配爲る」にさふんや

支配自性

の詞なり その譯けは「何を學ぶ」とやうよ目的格名詞に添はる「を」の辭を受けて活くべき詞なれ
 ばなり また「學び」といふ詞を、その目の一つなる「みづから然る詞」の例語とせるも違へり 全體
 「みづから然る詞」といふは語彙別記にあるのを、その儘とりて、ものせしめるべけれど、これまた違
 へり「みづから然る」といふ名目を設けたりしは、そも「語彙別記の著者が失りなり 落合直文氏
 らは、自身が語學の力無きゆゑに、その判別が、つかずして賣りしなり 是は「みづから然る」といふ
 活性の有るべき理を、その理由、何とすれば「みづから爲る事にもせよ、その活性、天然に出づる限
 り」は、やはり「おのづから然る詞」とし、たとひ、その活性、天然又出づとも、みづから爲る事の限りは、
 すなはち「みづから然る爲る詞」とせざるを得ざるは語法學理の犯すべからず經ふべからざる定則なれ
 ばなり もし然らずとせば「然る詞」と「爲る詞」とのわいたため何をもちてか判然たらしむべき 「み
 づから然る爲る詞」は、すなはち

自爲自性

にて「學び」といふ詞は、この範圍内に屬すべき詞には、あらざるなり「支配自性」に入るべき詞あり
とてまた「學び」といふ詞は

おのづから然る詞

の例語をせしを他より難問せられ後に「飽かす」といふ詞に換へたりを「世に冷評せることば、かねて
學生中に、かまびすしかりしが後再版のものを檢するに果して例語を改めて

四段加行

然る詞……………飽かす……………おのづから然る詞

同

みづから然る詞

然する詞……………飽かす……………みづから然する詞

同

飽かせさする……………他に然せさする詞

然せらるゝ詞……………飽かす……………おのづから然せらるゝ詞

同

飽かす……………他に然せらるゝ詞

と掲げ示せり、いよ／＼國語學に力無く語法の何たるを知らざるは証明するに足れり 斷言するに
足れり、そは中に就いて「然する詞」の細目の例語を

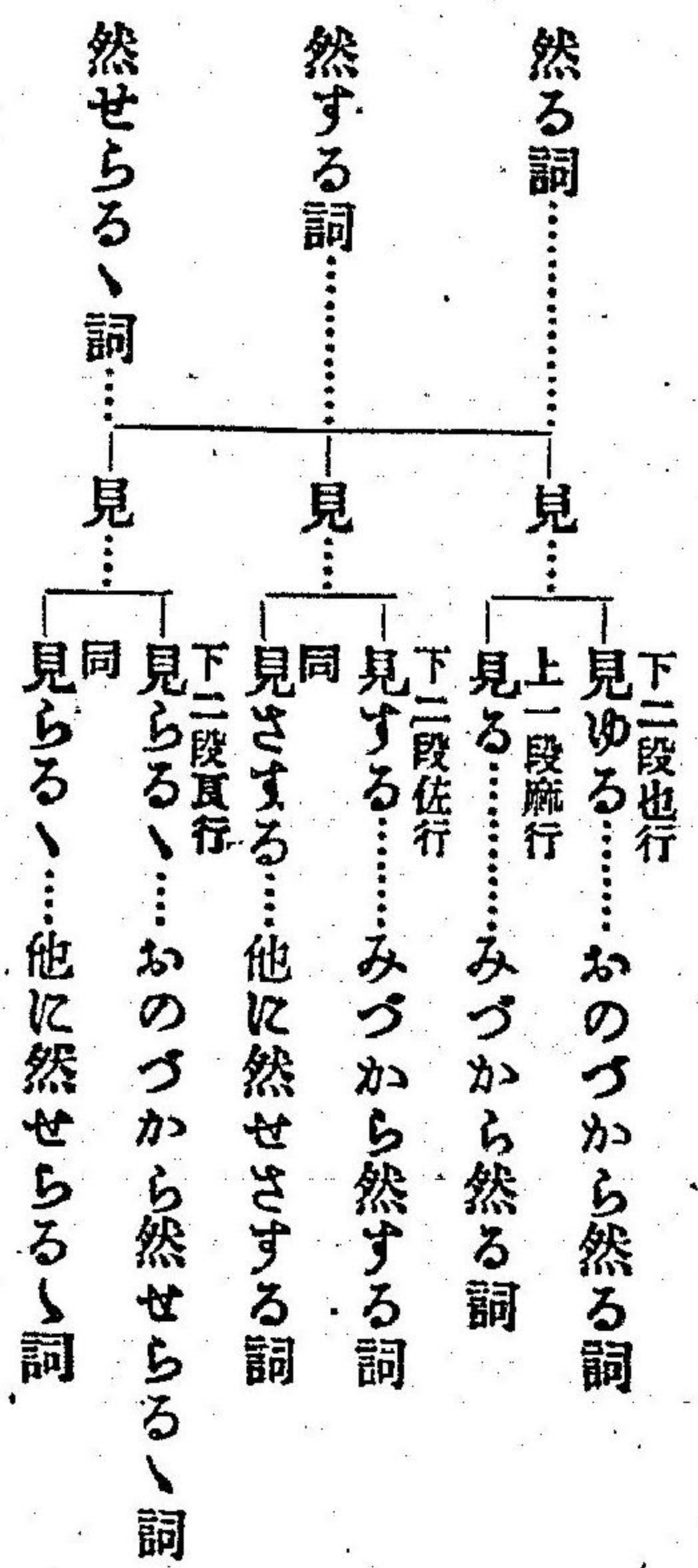
然する詞……………飽かす……………みづから然する詞

同

飽かせさする……………他に然せさする詞

とやうに「みづから然する詞」の例語を「行下二段活の」飽かす「とて」他に然せさする詞」の例語を

「と行下二段活の」飽かせさする」とせり。これらは。更に辨解をまたすして、その非なること明かき
り。またこの次の圖に掲げ示し、を見るに



と斷定して有り。中に就きて「然る詞」の細目の例語を

然る詞……………見……………
 下二段出行 見ゆる……………おのづから然る詞
 上二段麻行 見る……………みづから然る詞

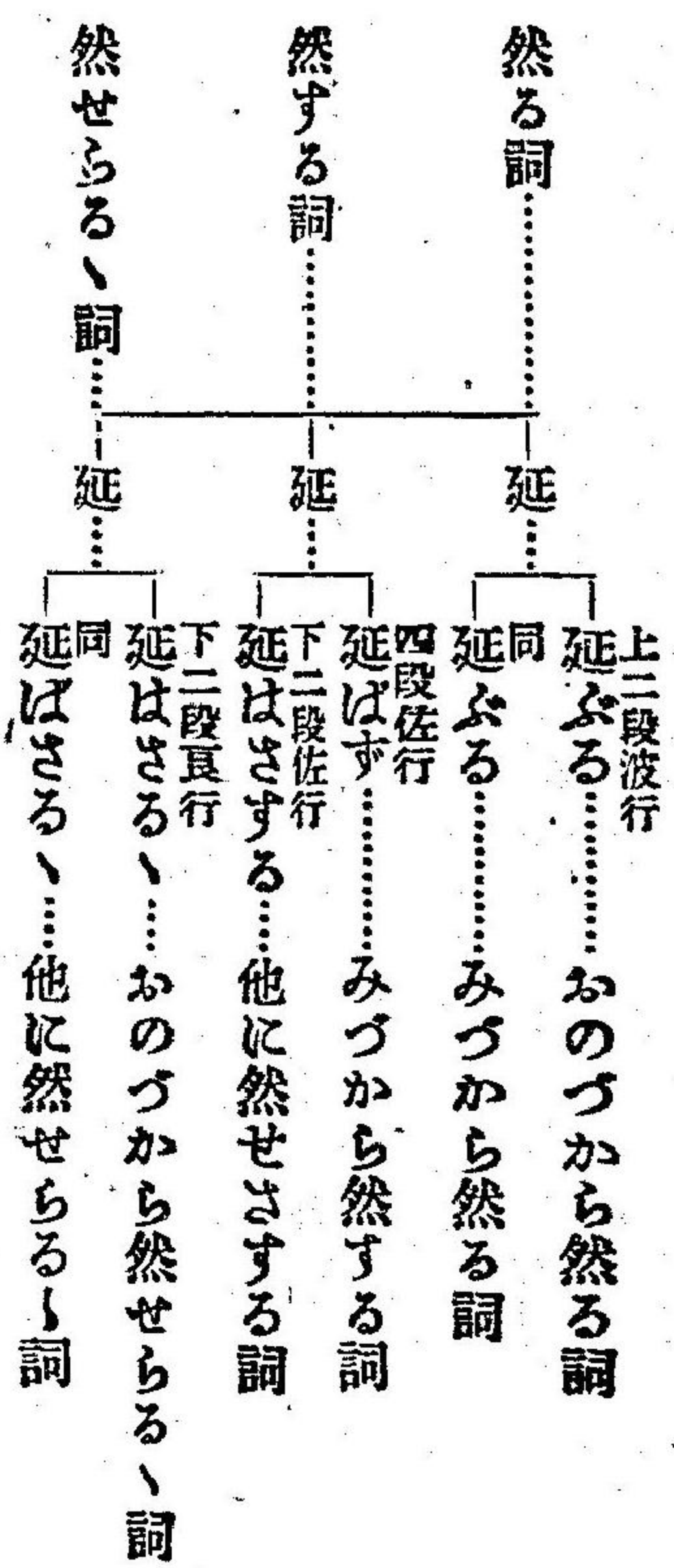
とやうに「みづから然る詞」の例語を上行上二段活の「見る」といふ詞を掲げ示しては、何とぞや。抱腹にたへず。

見る

といふ詞をば、いかにして「みづから然る詞」と断定しつるにか、「見る」は、元來然る詞には非らず然る詞の細別にしてはゆる「物を然する詞」すなはち

支配自性

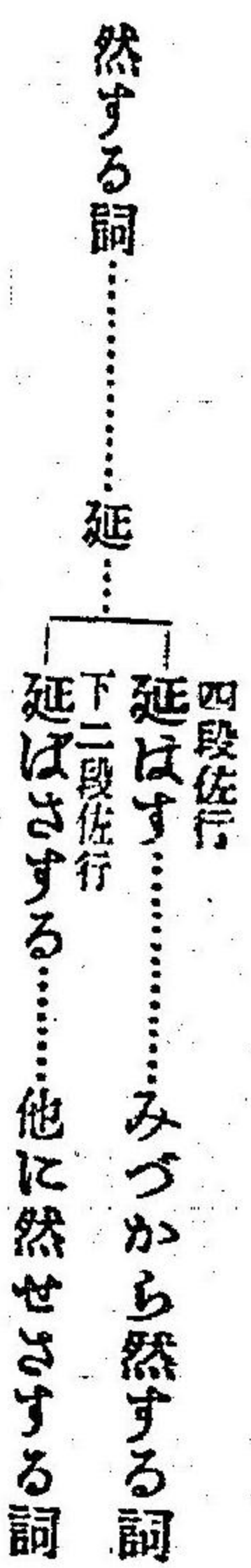
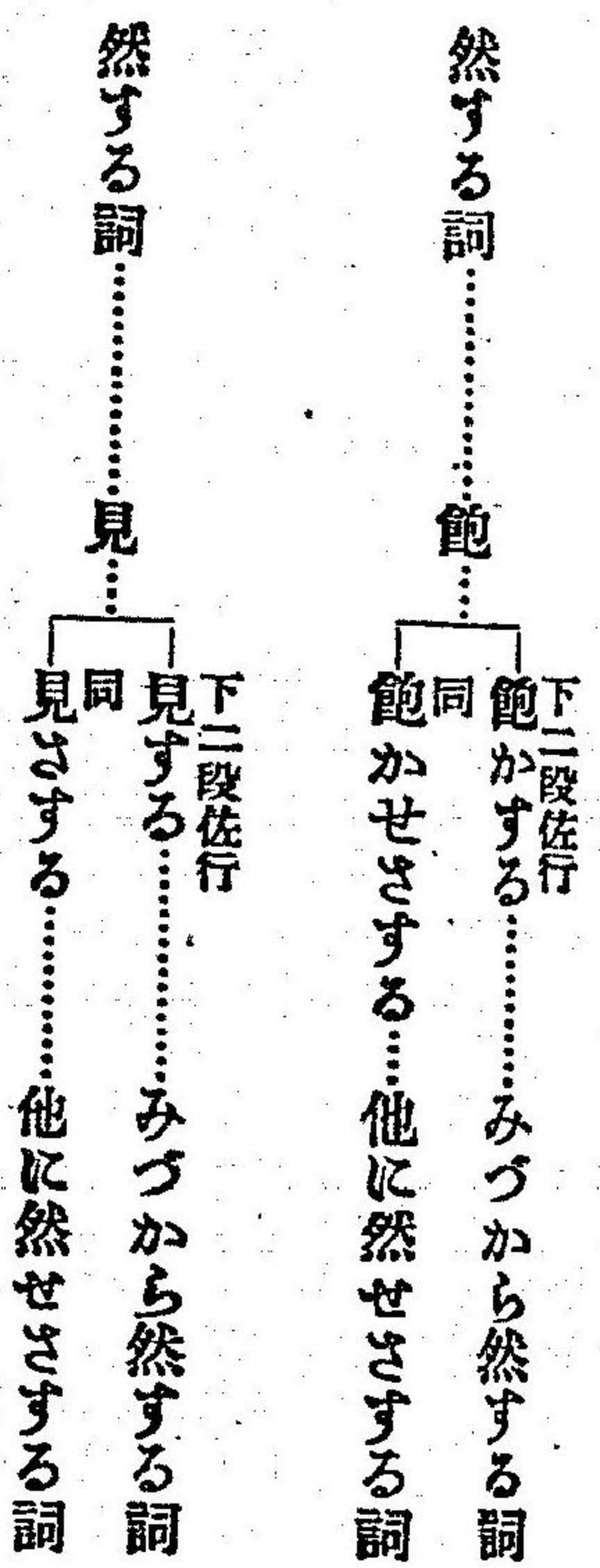
の性格ざるをや。「見る」は「何々を見る」とやうに、目的格名詞の「を」の辭を受けて活く活性の詞あり。ゆるに然る詞には非ずして然る詞なり。落合直文氏は「見ゆる」も「見る」も共に然る詞と心得ざるを見ゆ。然斷定しをること知られたり。語學に暗きもはごこと有れ。あまりなり。「見ゆる」は「を」の辭を受けては、決して活かざる詞なるに、「見る」は必ず「を」の辭を受けずしては、活かざる詞なるを、もて至て判別するに見易き道理なるをや。なほ、この次の圖に



とものして有り。中に就きてまた「然る詞」の細目の例語を

然る詞……………延……………
 上二段波行 延ぶる……………おのづから然る詞
 同 延ぶる……………みづから然る詞

とやうには行上二段活の「延ぶる」といふ詞を「おのづから然る」と「みづから然る」の二つに分かちて掲げ示し、いかなる考へぞや。いかなる據りかなる理由ありてか、斯く二つに分かたざるを得ざる必用ある。愚をいふべし。「然る詞」は「おのづからすなはち天然の活性にのみ屬し、みづからすなはち自爲の活性には決して歸せざるなり。「延ぶる」といふ詞を、もしみづからすなはち自爲の活性のものとするときは、決して「然る詞」には、さちざることを論をまたざるぞや。おのづからすなはち天然の活性なるものなればこそ「然る詞」とは謂へるなれ。最初の圖にも、「飽き」といふ詞をおのづからとみづからとの二つに分かちて掲げ示してあり。笑ふべし。稚しといふべし。また殊に笑ふべきの甚しきは「然る詞」の定めざるなり。そは、上にも辨難せる通りのことにて圖を分かちて更に示さん



とやうにせし示して有り。呆れたり。更に訂正したるを見るも矢張り斯くのごとし。「延ばす」も「延ばせとする」も共に皆然る詞すなはち自性格の活性のものと断定し、然してその細目を「みづから然る詞」すなはち自爲自性の活性のものと「他に然せとする詞」すなはち支配合性の活性のものとの二つに分かちたり。自性格中に合性格が混同せるのみならず「延ばす」といふ詞を「みづから然る詞」と思ひひがめたるをいみじき非なり。とほ

みづから然る詞は 自爲自性

なり。然るに、「延ばす」といふ詞は、「他を然る詞」にて目的格名詞の「を」の辭を受けて活く活性のものなればすなはち

支配自性

の詞なればなり。その混乱錯雑笑ふに絶えたる部目の立てざるなり。今その儘に圖して詞の名目だけを真正の學理に正して一目瞭々その非を見易からしめんは、左のごとし

然する詞(自性格)……延……

延ばす……他を然する詞(支配自性)
延ばさず……他に然せざる詞(支配合性)

また「見する」といふ詞も「みづから然する詞」にはあらず、「他に然する詞」にて、すなはち

供給自性

の詞なり。また「見さする」といふ詞は「他に然せざる詞」にて、すなはち

自爲合性

の詞あり。ゆゑに全く性格を以て異にすれば、「然する詞」の同部同なる細目に並べ列ねて、自他格を辨別せんこと更に秩序をなさざるのみならず、自性合性自他混錯せり。實に我が日本語法の學理原則を攪りに擾亂せしむるものと謂ふべし。落合直文氏、小中村義象氏よ、答辨し得べくば、答辨せよ。日本語法の上においては誰れ彼れをえらばず、道のために、ゆるし難し。後進學生のため、教育上痛恨措きがたければなり。

動詞活用の性格自他變化の差異辨別の學理意味なるは、落合直文氏、小中村義象氏のみならず。關根正直氏、高津嶽三郎氏、大和田建樹氏、物集高見氏らなべて學理立たす。漸次辨明せんと欲す

北斗(養氣會發刊)論說中、本會發刊に係かる

開發新式日本文典に對する批評を難す

○林氏に一言申す

林 麿 臣
水の舎 瀬橋

「林麿臣氏が開發新式日本文典に於て學理上より論究して言語文章の法格を緻密に精細に條理整然として解剖せられしは誠に古來未發の一新發明にして我が文典學上に一大進歩を與へ一大區畫を立てたるものにて其功や誠に大なる余輩豈に之を賞賛せざるを得んや然れども其諸家の文典を批評するに噴々たる小人のくちさきめきて人をのゝまりつくしてばうそくのふるまひなるはふつに感服すること能はず誠に歎惜の外なきことなりかし

抑々己れの新説をいひはらんとには勢人の瓊瑤をもとめて之をうたざるを得べからざるの場合なきにしもあらず彼様にざんばうばりせずとも正しき學理はあつと世に廣まり正しからぬはきえらする習ひにしまれば」云云

「解剖の緻密なる分類の繁細なるは(結尾辭の如きは都て三十三辭なるを二十八種に區分せり此の如く繁細に分類せば遂に一辭一箇の名を命すべきに至らん)とまれかくまれ其語原の解釋などに至りては牽強附會の痕跡掩ふによしなく杜撰極りたればなり」
林氏の語を借用す其一例をあげば
けりは來而在りの義

せりは爲而在りの義

にて時は半過去とあるなどは是なり是は大かた林氏はきてありしてありの約りなりとの説なれど

きてありはきたり

してありはしたり

とこそ約まれ

けりせり

と約まるものかは又右二辭をば時は半過去ありと分ち乍ら

ぬは現在ありとてツ、アルの譯語

をつけられたるは抑何の意不既よ

してありきてありが半過去なり

と云ふ

ツ、アルの如何でか現在あるを得ん若し又

ツ、アルを現在とせば

してありきてありの何とて現在ならざるべき云云と批難せり。肝ふとくも論じつるかな。

無暗にも難じつるか。面白し。語學に、のぼせたる人と見ゆ。熱度高まりたる人と見えたり。

かのかねてより語學上社會に向て論難攻撃せるは意他よあるにあらず。語學は、國のためなればなり。學理上、國の獨立と、人種の由來とを、證明するに足るべきものは、實にこの學の講究にあればあり。語學上無神經不熱心者の睡りをさまし、有志者を鼓舞せんとしてなり。無神經ならざりげある人を、思の外の地方に得たり。

さて氏が、以上論難せる要點を探るに、筆力いまだしく、文理、法に叶はざる故か。論旨のあるところを、知るに苦しむ。おしめては監察をくだしてみんに、

「けりせりは、來而在り爲而在りの義に非ず。

何となれば、

きてありしてありはきたりしたり

とこそ約まれども、

けりせり

とは、約まる法無ければなり。」との意あるべし。

また、その時格は、

半過去よ非ず、現在あり。」との意にや。果たして然らば先づ、これに對して辯難してん。氏が、

「きてありしてありは、きたりしたりとてそ約まれ。
けりせりとは、約まる法無し」とは、何ごぞや。いかまる據りどころ、いかまる證據あり
てか、然斷言しつる。

さてありのきてはけと約まり、ありのあは母音よて省かる例なり。その例證は、今「咲く開く
巻く」といふ動詞の各行四段活格から「行一格」有り」に合はせ活く學理につきて、と示さんに、
先づそが成立ちの語原より解釋して會得せしめてん

- 咲く は その語原 幸來なり
- 開く は その語原 廣來なり
- 巻く は その語原 圓來なり

(かつ因に言ふ、「來る」といふ詞は、彼方より此方へ遷り寄るのみの動作を言ふ詞にあらず。此方から
彼方へ離れ去る動作をも言ふ詞にて、すべて事の經過する動作を指して「來る」とはいふなり。そは、
萬葉集よ

大和には鳴きてか來らん喚子鳥

きとの中山呼びぞ超ゆなる

この歌は、象の山中に居りて喚子鳥が大和の國の方へ鳴きつゝ飛び超え往くを「鳴きてか來らん」と

よめるなり。

さるを、その「咲く開く巻く」をい列語體なる「咲き開き巻き」のきの語尾からての辭を受けて、「きて」
となるを反切法よてけと約まり「行一格」有り」のあが省かりて、

- 咲く は 咲ける
- 開く は 開ける
- 巻く は 巻ける

とやうにか行四段活格から「行一格」有り」に合はせ活く一定の格なるを、語の解剖上より語原學に
説き及ぼして、なほその

- 來而在り は けり と 成るの學理を示さん全く同例同格の反切法に據りその
- 咲ける は 幸來而在る
- 開ける は 廣來而在る
- 巻ける は 圓來而在る

とやうにそのきてがけと約まりあが省かりて「さけるひらけるまける」とあるが如く、やはり

けり は 來而在りの義にて、そのきてがけと約まり、あが省かりて「けり」となるは、上の「咲
ける開ける巻ける」の「ける」と同規一轍の學理にして、その格例に何ぞ異なるの理、あるべき。なほ

「通はず回はず暮らす」といふ動詞の「行四段活格から行一格」有り」に合はせ活く學理も全く同理由格にて、

通はず は その語原 通ひ爲あり

回はず は その語原 回ひ爲あり

暮らす は その語原 暮れ爲あり

(この語原を落合直文氏が「合通」などやうに合しむる意に説きしは、語法の學理も、通曉せざるひがことなり。思ひまがふなかれ、) ゆゑに

通はせる は 通は爲而在る

回はせる は 回は爲而在る

暮らせる は 暮ら爲而在る

とやうに、このしてがせと約まりが省かりて「かよはせるまはせるくらせる」となるが如く、これもやばり

せり は 爲而在りの義にて、その約まり省かりたる一定の格あることを証ふべからざる學理あり。なるを、

「きてありはきたり

してありはしたり

とて約まれ「き」と斷じて言へるを見れば、「きたりしたり」とのみ約まりて、その外には、約まる法の、無きものとのみ思へるなるべし。雅しといふべし。かたくまといふべし。何をなれば

きてありを きたりと 言ひ

してありを したりと 言ふ

は畢竟「し」の音係かりて活く語尾の「列語體から」而在り」の約まりたるたりの辭が添はりて、きたりしたり

と言ふ學理をたに知らざるものと見ゆ。

而在り こそは たりと 約まれ

來而在り爲而在り とやうに熟語の上よては、決して「きたりしたり」とは、約まらずして、

けりせり

と約まるが、語原學上一定の法なり。ひろく古言の約畧通轉の法に通じ、語法の蘊奧學理を知らば、是らの初歩なる學理は、論ふまでも、無かるべきことなり。こは、音韻の輕重に基づく連聲調語の掛け合はせに據ることにて、その熟語と語勢とにより種々に變化するものなり。かたくまに、思ひひ

がひるなかれ。他日おのれ語原學および言理哲學の書を著述せんと欲す。そを見られれば詳かにその理を了解するを得べし。

さて、おほこれを実地用例の上よりたしかめんに、

けり は 來而在りの義

せり は 爲而在りの義

と言ふ説の謬言ならざるは、

咲きたり は 咲けり

開きたり は 開けり

巻きたり は 巻けり

と言ふに、その意味も、その時格も、差異無きなり。これを以ても、その理を悟るべきなり。おのれ、

さき

けり を 來經在り

せり を 爲經在り

のきへが、けと約まり、しへが、せと約まり、あが省かりて「けりせり」となれるさまに、説きしかど、矢張り「來而在り爲而在り」の方、かへりて、學理にかなへるなり。

以上辨明せしにて、批評者が

「きてありはきたり

してありはしたり

とこと約まれ

けりせり

と約まるものかは「と言ひしは、全く非なる事のは、いかなる初學の語學生といへども、合點せらるべし。ゆゑに

きてあり は けり

してあり は せり

と約まるべき一定の法理ありて、

けり は 來而在り

せり は 爲而在り

の約言なる事の學理は、いかに語法學理に暗き輩といへども、瞭然辨知し得たるならん。水の含瀬橋とか、いふ批評者よ。もし、これにても、會得できずば、何回にても、よくその學理を辨駁して問へ。何がためだ、

「きてありはきたり

してありはしたり」

とのみ約まりて

「けりせり」

とは、約まらざるか。何すれぞ然論じつる。いかなる理法、いか様の證據ありてか、斯くは斷言しつる。速かに言へ。幾度よても、語學のことならば、多くみて、教へ示してん。

さて、また次に

「又右二辭をば時は

半過去

なりと分ち乍ら

ぬは現在なりとてツ、アルの譯語

をつけられたるは抑何の意を既に

してありきてありが半過去

なりといふ

ツ、アルの何でか現在なるを得ん若し又

ツ、アリを現在とせば

してありきてありの何とて現在ならざるべきと難せしに對し、いで詳かに辨へてん

「右二辭」は上に掲げたる

けりせり

の二辭なるべし。さて「このけりせりの時格をば

半過去

と定めながら、何ゆゑに、ぬの辭の時格をば

現在

と定めて、斯く區別したるぞ」との難問なるべし。いざ、その理由を辨明してん。

けりせりは 半過去

ぬは 現在

なるそがわいたゆは、

けりせりの方は、その語原

來而在り 爲而在り にて 而 が 二言組立ての間に添はりて、成り立てる辭なるに、

ぬの方は、その語原

去ぬ のみにて 而 が 添はらずして、成り立てるとの差異あり。そは、

而は (ちうして)

といふ意味にて、

けりせりは、一旦その 來る 爲る といふ事が、濟み終はりて、來 爲 といふ過

去の時格に、時を轉して、更に 而を以て 在り といふ詞に、接続して、成り立てる辭なり。然るに、

ぬは、その 去ぬ といふ現在の時格の詞のみにて、成り立てる辭なればな

り。ゆゑに

けり せり は 半過去

ぬ は 現在

なりと時格を別かちて區分せしなり。これらの學理は、語原學の範圍に學力が進みての上ならで
は、意味すこぶる高遠精微に涉り、學力淺きかいなでの語學生には、辨知し得ざるも、無理ならぬ事な
り。

以上辨難せしにて、批評者が

「けりせりの二辭をば時は半過去

なりと分ち乍ら

ぬは現在なりとてツ、アルの譯語

をつけられたるは抑何の意ぞ既に

してありきてありが半過去

なりといふ

ツ、アルの何ぞか現在なるを得ん若し又

ツ、アリを現在とせば

してありきてありの何とて現在ならざるべき」と言ひしは、全く非なる事のわけは、了解した
るべし。因て

けり せり は 半過去

ぬ は 現在

の時格にて一方は、而が、添はりて成り立ち、一方は、而が添はずして成り立てるゆゑに半過去と現
在との區別ある事の學理は、合點し得たるならん。是らの如きは、然のみ論するまでも無き初步の
法理なれば、よもや、わかるなるべし。

水の含瀬橋とかいふ批評者よ。もし、これにても、合點ゆかすは、何、返にても問へ。世のなま語學
家の如く、たゞ加減的に、推しあてを以て「斯様でもらう」「さうだらう」「は、相手とするに足ら
ず。ひまづひやしなり。「何々の法理、これ／＼の定義に悖るがゆゑにそれでは、違ふ。かうで有
る」とやうにその學理をあげて、打返せ。何、度にても、ますます深く教へるべし。

さて、又次に、批評者が、いはく。

「其つゝあるを林氏は、俗語の如くときたれど、俗語にはつゝあるの語あるなくこの

假へば

爲つゝあるは爲てをる

行きつゝあるは行きてをる

はなつゝあるはなきてをる

となるを其

てをるといふ詞は其わざの既に始まりて未だ爲し終へざる辭をいふ詞にて
咲けり爲せりなど、同じこのさけりなせりなども俗語にては

咲いてをるなしてをるとなりて

つゝあると同じく時は林氏の所謂る

半過去なり」と難せり。なるほど初學は、初學ながら、淺き力だけに、淺き理屈を並べたワイ。
かはゆしく。いぞく日本語法の學理を、いさゝか深く、すこし踏みこんで、まじめに、説き教へ
てん。

「つゝあるは俗語にうつせばてをるとなるなり」と批評者が、言ひしは、違へり。非なり。い
みトキ僻言なり。

つゝあるとてをるとは、素より性質を異にし、時を異にせり。ゆゑに

つゝあるとてをるとは、學理上同言よあらざるなり。然るを、同言と見なしをる

は、たまく俗言に、混し言へるに、その定義をも、推究せず。その學理にも、徹照せずして、れいの
加減的にわしてたるにて、言ふにも、足らず。稚しと謂ふべし。いぞ、その理由は、語原組立上

つゝは 現在の基礎格

ては 過去の基礎格

なり。また

あるとをるとは、その動詞の性質を異にし、

あるは 天性活

をるは 人爲活

のものなり。共に動詞の分類上存在動詞の部目を立て、それに組み入れて、定めては置きつれど、
實は、その中よ

をるは、作用動詞だちのものなり。たゞその活用格が、共に、一行一格なるゆゑに、然定
めしのみ。おのれ、かつて明治二十二年十一月一日の出版に係かる日本語學發蒙には、「有る在る
居る」の性質上三つの區別ある差異を辨じて、

「居るは 作用性が七分 形状性が三分

在るは 作用性が五分 形状性が五分

有るは 作用性が一分 形状性が九分

とすべき割合ひを有せり。斯く「有る」の詞に、形状性の、特別に多き理由は、形状動詞なる「無し」の
詞に、相對する詞なればなり」と辨じ置きし如く「居る」は、「有る」とは反對にて重に作用動詞の性質
の詞なり。ゆゑに

有ると居るとは、性質に著るき差異ありて、

有るは 存在性にして、天性の活きに屬し、

居るは 作用性にして、人爲の活きに屬し、

素より同性の詞には、決してあらざるなり。

さて次に

つゝとて とは、共にその語原は「果つる」といふ動詞から轉成せし辭にて、
果て 果つ 果つる 果つれ
と活けた行下二段活の詞なれば、その

果ては 過去の基礎格

果つは 現在の基礎格

なり。ゆゑに

ては 過去の基礎格の語尾すなはち果てより成り立ち、

つゝは 現在の基礎格の語尾すなはち果つの辭を重ね言ひなすより成り立てる辭にて、そ
もく語原からして、時格が、整然犯すまじく規律正しく學理に、一定の定義ありて、經ふべからざる
時格、確然と具はれり。ゆゑに

ての添はりて成り立てる辭は、なべて 半過去

ての添はらざる成立ちの辭なる

つゝの如きは、多くは、現在

なりと知るべし。ゆゑに

けり せり 咲けり 爲せり

の如く、

來てあり 爲てあり 咲きてあり 爲してあり

とやうに、ての辭が、添はりて、成り立てる詞辭は、必ず時格は、

半過去

なりと、これの如きが、斷定せしなり。またての辭が、添はらざる成立ちの

つゝの如きは、

現在

と、斷じて言ひしなり。さて、また

ぬは 「つゝある」を譯して、「てをる」とは、決して譯すまじき理由は、

ぬは 天性の活性なるものなり。然るに、その

「てをる」のをるは、上に言へる如く人為活の詞なり。然のみならず。その

「てをる」のては、過去性のものあるをや。ゆゑに、

現在性なるぬは、 「つゝある」を譯するが、當然にて、「てをる」とは、譯すまじきは、學理

のゆるさざる定義なり。水の含瀬橋とかいへる批評者は、

つゝあるとてをる どの通俗語の上に、おける解釋すら、かみくだきの出來えぬほどの淺

識なる語學生と見えたり。水の含瀬橋氏は、蓋しつゝといふ辭の意味すらとぎ得ぬなま學者と見え

たり。なほ、それが俗譯を對照し、はた一二つ、古典に徵照し、用例を引証して、辨へてん。

先づ、その俗解の定義、左の如し。

つゝある は 「それながらある」「また」それなりである」
てをる は 「てままうてをる」「また」さうしてをる」

とやうに一章句中その、文意の趣きと場合とにより、二様に譯すなり。そは、

つゝは 「ながら」「また」なりで
ては 「てままうて」「また」さうして」

と譯せばなり。ゆゑに、

つゝある と てをる とは、意味あひ去る事、甚だ遠く、時格現、過、判然し、性質また、天性、人爲の別、いちまるし。

「つゝあるは俗語にうつせばてをるとなるなり」と斷言せし瀬橋氏が説は非なるなり。なほ、その俗解の類例を、示さんば

爲つゝある は 「爲ながらある」

行きつゝある は 「行きながらある」

咲きつゝある は 「咲きながらある」

と譯すなり。その

つゝある(それながらある)といふ詞は、そのわざの未だ目前に、見るくそれなりで、然爲しゆき、然成りゆく動作を指して言ふにて、その事の終らざる間を、示すなれば、時格は、

現在 なるは、勿論の事なり。然るに、瀬橋氏が説に據るときは、

爲てをる は 「爲てままうてをる」

行きてをる は 「行きてままうてをる」

咲きてをる は 「咲きてままうてをる」

と譯さるを得ざるなり。ゆゑに、同氏が、

「爲つゝあるは爲てをる」

行きつゝあるは行きてをる

ひきつゝあるはひきてをる

となる云云を斷じて瀬橋氏が、難せしは、却りて、ひがことなり。いみじき誣ひことなり。古書も、ろくに眼をさらしたる事、無き者を見ゆ。

ては 半過去にて、「てままうて」

つゝは 現在 にて、「ながら」

と譯すべきその例證を、示さん。

(源氏物語夕顔の卷) 「中將のおもと、御格子一間あけて見奉り送り玉へ」と、おぼしく、御几帳、ひきやりたれば、御々し、もたげて、見いだし玉へり」

右の「御格子一間あけて」を、「御格子一間あけつゝ」をやらに、假りに書き改めて、てをつゝに、かへて見んに、文義解し得べしや。否。瀬橋氏よ、いかに。中將のおもと、いかに手が、長からんも、よ

もや表の御格子を、あげながら奥の淺所に、立て、ある御息所の枕への御几帳を右と左との手して一
邊きに、引き遣る事が、出来うべきかは。苟も六條御息所の住まひなり。まさか九尺二間の裏店住
まひの如くには、あらざるべし。また

(土佐日記正月三十日の條)「夜半ばかりに船を出だして阿波の水門を渡る」

右も、同例にて、「船を出だして」を「船を出だした」とやうにてをつゝに改めてみんに、紀氏の
船いかに大きく、いかに長からんも、土佐の泊の海岸より、船を出だしあがらに里程を隔てたる阿波
の水門を渡り得らるべしやは。そは、ともづな、ときて、船を出だし、さうして、後に、水門を渡るな
り。上のも、表の格子をあげてしまつて、後に、奥の几帳を引き遣るなればなり。瀬橋氏よ、いか
に。佐渡の國も、新潟縣なり。日本のくぬちなり。語法に、かはり有る道理無し。けだし批評者
が學力では、六條御息所のいへむと、九尺二間の裏店すまひと解しをるか。阿波の水門の海なづ
らも、堀江か、小池の如く見させるにや。古書國文を、さやうに説かれた日には、あるは、泣き、ある
ひは怒る國學者も、あらん。無下の俗語俚言を、定木とし、おのれが短き學力をものとしとして、無
暗滅法界に、語法をきりもりし、嘴入る、事は、ちとやめたが、よい。他の學科とは、違ふ。國體上
重大の關係ある學問なり。道のため國のためなれば、飽くまで論ずるは、よし。論難攻撃するは、
學者のつとめなり。學者の地位を高むるなり。學科の價値を高むるなれば。斐臣が、畢世の業と
して、任して國のために身を忘るゝところなり。素より相手を好むものなり。飽くまで難じ、飽く
まで論ぜよ。わは、飽くまで辨へ、飽くまで答ふべし。

さて本會の開發新式日本文典に對し、水遁舍瀬橋とか、いふその子が、ござかしくも、論難せしを、逐條のこ
すところ無く辯難し、一々うちきため、一々うち破り、一々言ひすくめ、一々言ひあなづり、一
々しかり教へ、一々しかり倒し、一々その理由を語原に証據だて、一々その學理を古典に徵照
し、以て一々口あかせす。一々鼻へこませ、一々頭掻かせ、一々頼うな垂れさせ、一々面伏せ
させ、以て耻知らぬ千枚張りの面の皮、逆はぎに、はぎ耻ぢしめ、逆むきに、むき懲らし、に、尙ほ懲
りすまに、しやうも、こりも無く、更に有らぬ筋の筒條をもと、又ぞち北斗第二十四號に、算へあなぐ
りて、難じて來をれり。さて、面の皮の厚きには、實に肝が、つぶれたり。語學の力に、反し、面
の皮だけは、中々の博士なりけり。滅法界に、うたてある博士なりけり。全く語學に力無きは、知
られたり。腹黒き多し學者なるは、知られたり。護摩化しのみ學者なること、論を俟たず。聞
いた風なるなま書生なる事、相違無し。何となれば、本會に對し、おのれしたり顔に、鼻に掛けて、撥
ひ出だし、説を、形も、無く、打破られ、反て逆ねぢに、打すくめられ、立つも、はした、居るも、はした
にて、耻を世上に見ながら一句も出ださず。グウの音も、出ださず。斐臣が、辯難攻撃に對して、
その理由證據をあげて、答辯し得ずして、あらぬソツ方なる事がらに、ぬけ逃げて、果ての結論に「今
は、いたく之を、くい恨むれどもせん方なし因てこのたび限りにて彼様なる空論は爲じと覺悟せり」
など、卑怯未練の言を吐きつればなり。窮したりと見ゆ。答辯に、詰まりたりと見ゆ。怕ぢたり

と見ゆ。閉口したりと見ゆ。何の科を問はず。かよを學問上に就き、苟も他人の著書に對し、批難を試みんとすれば、かのれ自らその學理原義を推し究め、その法理の如何を會得徹底せし上にこそ學理開進のためにすべけれ。その力無く何の得たることも無きなまものじりに、輕々しく嘴いるは、をこなり。よく無き事。況や國語學の上をや。「これは、斯くくの語法。それは、斯様々々の原義。この簡條は、是々の原則に反するが故に受けられずとか。その説き明かしては、古典に徴するに、何々の句格に違へり。故に批難せざる能はずとか」とやうに、辯明するにあらざれば、その論旨の由るところ。その論據の歸するところ、何れに存せるか知るに由なし。何の道理あるがために論難せしにか、更に解せず。笑ふに絶えたり。稚きも、程こそあれ。予ふみ月ばかりより炎暑のために病蘇に臥し沈み、今に神思鬱重、とかく心ち例ならず過々とするのみならず、常に交際をも、絶ち、寢食の際すらぬすみ、寸陰を惜しむ身には、うたて、こうるさく除費やしなれど、病も、すこしひまあり。氣分よろしきまゝに、保養がてら、ちと又小言いひて、しかり散らして、なほその瀬橋の子が、語法學理に、諷無く力無きを、いでや世に廣告して、つかはしてん

さて先づ北斗第二十四號よ、水の舍瀬橋が、言へる儘を、列ね記し、一々れいの如く口あかせず、打すくめ耻ぢ見せて更に頭掻かせて、くれてん。いでや、その瀬橋が、言へらく。

「林氏の文則批難を批難す

水 廻 舍 瀬 橋

「林麴臣が己が發明にて

「何を 係辭の外に出だしたり」といへれど、是も久しく前つ世より先哲の説あることにて其第一は、てにをば、ひも鏡 よりも尙ほ早き安永二年六月の著述なる脚結抄（註）に既に其はしは見えたり

脚結抄卷一疑屬の條に

「凡そ疑（註）せよ（註）なり（註）の脚結さま（註）くにつきてよめど、そのもとは、唯

や（註）か（註） の二つなり、云々」といへるにて

何を 係辭とはせぬ意はへほのかに見えたるを萩原廣道といへる人、弘化三年に てにをば係辭辨 をして斷然

何をば 係辭の外に出だしたり又堀秀成も 非加計かつら下の卷に

何をの辭を 係辭には非ずとして委しく論らばれ富樫廣蔭の 辭玉だすき にも

何を 係辭に加へぬ由見え物集高見氏の （註）てに教科書 なども其むきなれば決して麴臣などの發明には非ず麴臣は唯先哲の糟粕を管めて其味のいとうまかりければ遂に其實物までを齧み食ひしに過ぎざるのみ豈にをこのわざならずや」と、むらゐ至極、失敬千萬にも、麴臣に對し、肝太くも、よくこそ言ひつれ。面白きやつこかな。しかし、かはいさうなるをの子かな。類ひなき小人よな。さても小さき心構への卑庸人よな。道のために論ずるには、あらずして、全く惡意に出でたる

事、しるし。うづなく人の才學を、ねたむ意に、出でたる事、疑ひ無し。
さて是よりそろ／＼筆とりなほし餘り癖になるから病後の瘦ちから張りて、しかり飛ばして、つかは
してん。筆の尖で轉がし倒して、くれん。いぞこの藝臣が、本書文則批難に

「何を 係辭の外に出だしたり」とは、何れの條に言ひしぞ。何れの篇にか言ひし。藝臣は、

何を 係辭の内に、算へ入れて、全く

何を 起首靈辭として、

のか何徒 と斷定して居れり。然るを、

「何を 起首靈辭の外に取り除けつ」とやうに、瀬橋が口を極めて、言へるは、全く惡意に論を構

へ、説を曲げて廻ふるなり。そは、新式日本文典第一編第六號の附録文則批難に、予が講述せしには、

「本居宣長翁が」てにをば「の係辭の大綱を三條に、立てられしを」更に一新改定して

のか起

はも起

ぞや起

こそ起

とやうに四條に分ちて、そが格法の序次分類を秩然たらしめたりき。しかして、なほ年を重ね敷

回の訂正を経て、やうやく今日に至り確定せりたゞし

のか起

はも起

ぞや起

こそ起

「のか何徒」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「はも起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「ぞや起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「こそ起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「はも起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「ぞや起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「こそ起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「はも起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「ぞや起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「こそ起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「はも起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「ぞや起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「こそ起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「はも起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「ぞや起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

「こそ起」は、共に「はも起」ぞや起」の輕重二性を兼ねたるものと知るべし

が、類ひに非ず。數等學力の段が、比較の外に起絶たる予かし。たゞ説が、粗きのみなり。その粗なるゆゑよしは、

何の上下に添はるべきやかの起首靈辭が顯はれて、在るものと、隠れて在るものと、の差異を辨別すべき識力が、未だそこに見開きの至られざりしのみなり。何を指して起首靈辭と斷定せられしぞいみじき卓見には有りける。

さて尙ほ瀨橋をの子が、卑屈なる證據、無學なる證據は、「物集高見氏のては教科書なども其むきなれば」なを證據だて、言へるを見れば、物集氏をば、中々の語學家と見なして居れりを見ゆ。笑ふべし。稚し。低きをの子かな。ちひさきやつ子かな。この靈臣に對し國語學上に論をまじへ、筆もて戰はんとならば、しよ三四十年はども、日夜苦學せし後にものせかし。いまだ早し。ちよかのが力のほどを顧みよ。事、惡意に出でたる卑劣心を耻ぢよ。世間に識者ある事を知らずや。日新文明の世ある事を知らずや。その惡意に出でたる卑劣心なる證據は、「開發日本文典第六號の附録文則批難中、上に掲げ示せるつゞきに、予が講述せし何の説明かし中、「範圍外に取り除けず」の字の一字を脱して、印刷せし所ありて、そは、

「そのや何

の」の「を」を分け離ちて別に「の」が起の條を立て、「何」をば起結法の範圍外に取り除けきた「よ」はも

起の條に加へたり云々とやうに、「取り除けず」のすの一字ゆくり無く誤植したりしを見とめて、言へるなるべし。その全く誤植なる理由は、その續きの上に、一目表に掲げ示して、

「の」が起は「の」が何徒（の「何」徒は共に「は」と起さずや起す）の輕重二性を兼ねたるものと知るべし）

と論究せしにて、その全く誤植なる事昭々として紛るべくもわらざるをや。是れ惡意に出で、卑劣心にあらずして何ぞ。瀨橋やつこ、いかに。眼、腐りたるか。心、腐敗しをれりや。甚だ卑劣千萬なる批難の仕方なり。瀨橋おれ、こやつ。以上、辯明せしにて、予が

何をば 起首靈辭すなはち(係辭)と斷定しつる事とまた

何をば起結法の範圍外に「取り除けず」と斷言せしを、印刷の際に誤植しすの一字を脱した

りし事は、明確なるべし。さて又

の「の」辭に就きて、ちよさき、呵りつけて、くれん。瀨橋、いへらく。

「又の」に輕重ありて、ひも鏡の所謂一段と二段と二方に結べることを發明せしは天保七年に物せし林國雄の詞の緒環なりといへれども其はしは早く天保六年に抄録せし助辭本義一覽に此の、言の如く体語の下にのみ附きて用語の下に居らざるも右の意なればなりか、れば物を指定むるぞなごは其義もどより異にして他の指辭の如く結びにかはるべき言にはあらざるをぞや等と同じく相並べ

て一つに心得来しはいかなることなりけむ。云々」とて。つまりは。は徒に同じく係辭には非ずといへるを嚆矢とす然れば國雄も決なく此守部の説に驚かされて始めてのに輕重あることを曉れるにていは守部のたまものこそいふべけれ何ぞ國雄の發明ならん」とれいの旨、蛇、物におぢすと云らんが如く國語學の法理に暗きゆゑに、守部氏が甚だしき僻説を擔ひ出だして、の、しれるぞ、煩まされ、腹抱へも、せらるばかり、をかしかりける。何となれば、守部が説は、要するに、

の 徒に同じく係辭には非ず。
と斷定せし論旨なる事、あるし。 是はいみじき僻説なり。國語法理の、何たるを知らざる妄説なり。祖父國雄が、詞の緒環に言へりし説は、素より

の 係辭なることを主張する論旨にして、たゞその辭に輕重ある事を發明せしなり。豈守部氏らが説と同日の論ならんや。 守部氏が如く「の」は、係辭にあらずなを言へる僻説ならぬや。 何を以て、然の、しれるにか。 更に解せず。 故に眼、腐りたるか。 心、腐敗しをれりや。とは、言ふなり。

抑も守部が説の、愚もまた甚だしき、ひがことなる理由は、
の 係辭と接辭との二様ある學理をすら辨知し得ざるなり。 殊に甚だしきは、
の 係辭とせざるあり。 その理由、何となれば、
の 係辭すなはち起首靈辭中、殊に本然たる性質のものなり。 ゆゑに聖臣は

の 起 を 第一におき、はも起ぞや起こそ起を次々に並べて秩序を立てたり。 とは、
「はも」以下の起辭は、つまり

の 起 の 變體にて、實は、
の 起 は 動作の舉止を呼びおこし指し示す辭にして「はも」は、同じく動作の舉止を指し示す役目にかゝつては「の」に異なる無し。 たゞ「が」の如く純粹に専らならずして他に意味を兼ねるの差別あるのみ。 斯くの如き高遠精微なる語法學理に至りては、瀬橋氏が、逆さに立ちても、其の與義原理の何たるは、わかる氣づかひ無し。 素より論すべき限りに非ず。 その證據は、守部が學説の語法學理に反し、いみじき非なる事を、辯じ得ず、その説をよしとして偏信し深く仰きをれりと、見ゆればなり。 そのわけは、その續きに瀬橋いへらく。

「さて聖臣が新式開發など、ことごとくしくいふには、似つかはしからずのが起首靈辭として、ひも鏡の一段二段の兩屬辭なぞ、いれでこはいみじき僻言なり 〇がは一種の接續辭にこそあれ係辭にはあらぬなり其よしはいと委しく助辭本義一覽に論ぜられたるが係辭辨及ひ鈴木重胤の詞のちかみちにも其よし見えたり其ひとつをいは、の 〇がの係辭ならぬはひも鏡の所謂一段二段の二方に結び又二段の係辭なるぞや、か三段の係辭なるこそ等とも重ねいへるも元より結びにかゝるまじき言のよしを覺るべきなりと守部がいへる又の 〇がは係辭にあらず此と彼と離れ々々なるものを連れ接くる辭なり

この故に常にそやかこそと重りてあれども其結びはそやかこそにて結ぶにても炳焉りと重胤がいゝる何れもよろし誠に動くまじき説なり
 すべてのがの辭はあるもなきも結びには少しも關らず徒にまれぞやかにまれこそにまれ其係辭の出るまにくのがのありやなしやをとはすして各其係辭の格に従ひて結び徒の格を更に異なるふしなければ係辭にはあれぬこと著し然るをことさらにのがを係辭などいへるはいふにも足らぬ僻言なりとよく淺き學力を顯はして、したり顔に、楠守部や鈴木重胤らが幼稚の説を持ち出たして、のゝしれるぞかはゆき。わがこの帝國の語法を破るゑせ學生は、唾しても蹴たふすべし。齒牙にかくるに足らずとすも、打もかなぐりてん。その學力の淺きわけは、
 起首靈辭すなはち係辭に、その句格の「調節より、これを判定するもの」と「意味の上よりこれを判定するもの」とのけちありて、起結法の格に二様に、區別ある學理を辨知せざる故のことぞ。さればこそ、

結辭の格が「のが」の起辭と他の起辭とが、重なる時に「ぞやかなんこそ」の方の格にて、結ぶ例なるにのみ拘泥して、淺識の語學生は、さるひが説を主張しつれ。そはたゞ語氣調節の輕重によればなり。一句中、その意味の基き歸する上に就き、本末を判定する時は、無論
 「のが」の起首辭に文意が歸して、本となりて、その名詞はかならず主格となるなり。これに對して他の

「ぞやかなんこそ」は、末となりて、その名詞は資格となるものと知れかし。こは襲臣が、千古未發の一新啓發にして、實に空前絶後の創唱たり。これ素よりみづからを誇稱するに、あらず。海外各國に對し、國のために公然誇らざるを得ざるなり。文章粗立て上の照應法中、意味「趣向」本の末によりて、照應の格を正すものと、「語氣調節」の輕重によりて、照應の格を正すものとの辨別を立て、文法の學理上句格に、主賓本末の別を詳かにし、照應法を秩然たらしめたるは實に予が多年苦學の結果にして、本編をもて嚆矢とす。いで瀬橋が引ける證歌に就きてさし示さん、
 「こそ」と重なるのが起辭の例
 5つの間にかげひの水の氷るらんぞこそ風の音のかはらぬ

右「千載集の歌は、」資格 主格名詞「こそ風の音のかはらぬ」の句中「風の音」が、主格名詞なるは、論を俟たざるなり。
 瀬橋らが如き淺學生は、「こそこそ」の方を主格名詞と、するか。笑ふべし。
 なきあとの面影をのみ身にそへてこそは人の戀しかるらめ

右「新古今集の歌も、」資格 主格名詞「こそは人の戀しかるらめ」の句中「人の」が、主格名詞「こそは」資格なり。
 瀬橋、眼を三角にして、よく見よ。おのが淺學を知れ。
 「ぞ」と重なるのが起辭の例

青柳の糸よりかくる春しもぞ亂れて花のはころびよける

資格 主格

大方は月をもめでじこれぞその積れば人のれいとなるもの

資格

右「古今集の歌も」「花の人の」は、主格名詞。春しもぞこれぞは、資格。なるが如し。瀬橋いかに。

「や」と重なるのが起辭の例

春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん

資格

主格名詞

たえずゆく飛鳥の川よよみなば心ありとや人の思はん

資格

主格名詞

右「古今集の歌も」「人の人の」は、主格名詞。「つみにやありとや」は、資格なるが如し。瀬橋ど

うぢや。まゐつたか。一番。

「か」と重なるのが起辭の例

命だに心にかなふものならばなにか別れのかなしからまし

資格 主格名詞

雪とのみふるだにあるを櫻花いかにせよどか風のふくらん

資格

主格名詞

右「古今集の歌も」「別れの風の」は、主格名詞。「なにかせよどか」は、資格なるが如し。やつ

こ、どうした。是でも、こりないか。まかし斯くの如き學理の高尙、意味の深遠なるに至りては

噛みてくゝひる様に、教へよとしたりども、馬の耳に念佛。かゝるの面に水なるべし。卑劣にし

て曲れる根性は、憎むべきなれど、しかし國語學に、ともかくも、熱心らしき所も、見ゆれば、しか
りたふしても尙ほ教へくれん。
さて「はも」と重なる場合には、「のが」の格によりて結ぶ例なるぞよ。その理由は、「はも」は輕性
の格。「のが」は輕重あひ半せる中性の格なればなり。これ、すなはち語氣調節から對比するも
意味起因の上より、對比するも、

「のが」の方が、「はも」の方よりも、權力が、劣れるを以てなり。

例證をさし示さんに、

「は」と重なるのが起辭の例

春霞たちて雲井になりゆくは雁の心のかはるなるべし

資格

主格名詞

右「後撰集の歌は、「のが」の輕き格にて、結べるなり。

「も」と重なるのが起辭の例

三芳野の山の白雪ふみわけて入りにし人の音信もせぬ

資格

主格名詞

右「古今集の歌は、「のが」の重き格にて、結べるなり。

「他」と一里ならざるのが起辭の例

待つ人にあらぬものから初雁のけき鳴く聽のめづらしきかな

右「古今集の歌は、「のが」の輕き格にて結べるなり。瀬橋いかに。いかに不學なりとも、おのが力無く、たゞ古人の糟粕のみを、なめて、語學家然たるませ學生のはづかしきを少しは、面なく思ひ知りたらん。國語學に力稚きを耻ぢたるべし。北の邊、萩原、富樫、守部、重胤、又堀、物集、の諸氏らが、日本語學に、いまだしき學力なる事もわかりたらん。さるを、藝臣に對し、人の説をぬすめりなど、の、しれるは、ゆるし難き言ひざまなり。おのが卑劣心を尺度として他人の心の上までも、然あらんと、想像し、猥りに口を極めて、の、しれるは、甚だ憎むべき過言なり。うたて賤しむべき惡意なり。臆ふとくも、予に對し、近時新刊の文典どもの著者多し學者が如く古人(富樫廣蔭、堀秀成氏其他)の語學書あるは今人(大槻文彦氏、又藝臣)の既に世に刊行せりし書中より抜きとりて焼き直し、跡、明々瞭々掩ふに途なきもの、類、多きを、それが類ひと見なしたる言ひざまなるは、うたて、ゆるし難き暴言なり。うたて、けしかるやつ子かな。不日本邦語學歴史を編成し、語法文典發達上に國のため與かりて力ある古今人傑の功勞をたゞ、併せて卑劣學者が、道をけがし、徳を破れる罪を公言して、天下輿論に訴ふべし。編、成るを待ちて、その正否曲直を見よ。汝が愚論も、かならずたゞすべし。その時を待て。

右は、北斗第貳拾四號に、
瀬橋が本會文典につき批難しつるに對し、辯難せるなり。尙ほ同誌第貳拾五號に、論ぜらるらば一覽の上本編次號に、しかりつくべし。

以上辨明せしにて 瀬橋が、

「北の邊、萩原、堀、富樫、物集、の諸氏が、本居宣長翁が、

何を 係辭と斷定せられしを破りて、をこにも、

何を 係辭の外に、取りのけたりしに對して、藝臣は、

「何をば 起結法の範圍外に取り除けず」と本誌第六號の附録文則批難に、言ひしが、ふと「取り除けず」のすの一字脱して、誤植せる印刷の失に出でし事は、瞭然明確たるべし。また、ついでに委しく教へ示さん。

何の 上下に、添はるべき「やか」の起首燈辭が「顯はれて、在る格と、隠れて、在る格」

との差別あり。その隠れて在る格の中に、「やか」の添はり含まりたる格は、やはり「やか」の顯はれて、在る格と、同様に、重き格をもて結び、「はも」の添はり含まりたる格は、すなはち「はも」の顯はりて、在る格と、同様に、輕き格をもて結ぶを定法とす。その例証、左の如し。

「やか」の添はり含まりて隠れたる何の例

(古今集十一) 瀬つ瀬の中にも淀はありてふをなせ(か)我が戀の淵瀬とも無き

(新古今十六) 八重ながら色も變はらぬ山吹のなせ(か)九重に咲かすなりにし

(新古今三) 夏草は茂りにけれと郭公(や)なせ我が宿に一聲もせぬ

(六帖) み熊野の浦の濱ゆふしく重ね(か)我をば君が思ひつたつる

「はも」の添はり含まりて隠れたる何の例

(後拾遺十一)

奥山の真木の葉しのぎ降る雪の(つ)は「解くべし」と見えぬ君かな
(古今集十)カ
「まきく日」も「春し無ければ鶯も物はながめて思ふべくなり」

とやうに、何の上下に「やか」また「はも」の添はりたるが、隠れたる格と、顯はれたる格との二様あるを辨へ知れ。これ鑿臣が、空前絶後の一大新發明なる事を、再拜拍手し謹みて、仰ぎ承れ。我が大日本帝國の語學の力に於ては、本居宣長翁、本居春庭氏の上に凌駕し、開闢以來、千古未發なる語法學理を發揮し、千歳の業を一新啓發せしこと本誌中かぞへ知らずあり。茲に北の邊、萩原、堀、富樫、物集氏らが、類ひならんや。人を、あなづるも、休みくせよ。瀬橋、見そこなひしか。水の舍。さて、また

「のが」起辭の如きも、橋守部や鈴木重胤氏らが「係辭」にあらず、一種の「接續辭」など言ひし論は、語法學理の何たるを無下に辯知し得ざる妄説なる事は、よもや、了解したるべし。なほ、その法理の然る本義を、さし示さんに、凡そ一章句中、文章の因て起こり由て歸する所のものは、主格名詞なり。主格名詞の語尾に添はる起首繼辭は、「のが」を以て本然の性と、なすこと、前號に証歌を掲げ示して斷定せしが如し。而して文章組立て上の照應法中、「意味趣向」の本末によりて、照應の格を正すものと、「語氣調節」の輕重によりて、照應の格を正すものとの辨別を立て、文法の學理上句格に「主實本末」の別を詳かにし、從來蒙昧なりし照應法すなはち係結格を更に一新改定して學理を秩

然たらしめたるは、實に本編を以て嚆矢とし、先哲語學家の未だ曾て言はざる所たり。予がこの開發的に、改定せしこれが法理の規矩を以て度りなすときは、本居宣長翁の詞の玉の緒と、いへどもはた北の邊氏が脚結抄萩原廣遠氏がてにをば係辭辨橋守部氏が助辭本義一覽鈴木重胤氏が詞のちかみち堀秀成氏が非加計かつら富樫廣蔭氏が辭玉だすきらに於けるも、なべて筋立たず、文意の由る所、歸する所を知らざるもの、如し。杜撰と謂ふべく。雅しと謂ふべきものをや。水の舍をの子、今日は、文明日新の時なるぞ。瀬橋かれ、世界の氣勢を知らざるか。漠然たる陳腐の説を擔ひ出だして談ずるの日にあらず。學理日に進み、學說月に改まるの時なり。古き和學者流が、はつきりする世界にあらず。あやしの蒙昧學者が、口利く時節にあらず。然るに北斗第二十五號を見れば、いよく面の皮、千枚張りで見ゆ。いよく學力は無下に乏しき男と見ゆ。いよく小人なるやつこと、見ゆ。いよく惡意に出でたるは、知られたり。本誌開闢新式日本文典第十五號の附録文則批難に、あれはを噛んでく、むる如く例証まで引いて説き示せるに、實にあきれた、をの子なり。實に頑固きはまるやつこかな。かし太しと謂ふべし。耻しらすと謂ふべし。負けをしみの強きも程こそあれ。愚もまた甚だしきは、言ふに詞なし。馬鹿げたりと笑ふべし。をこなりとあざむべし。その説きあざむの、しりぞき、左の如し。

「ッ、アッ」テラルにつきて鑿臣は噉々數百言を費やしたれど余が説は之を要するに據べて譯語といふものは衆人の分るやうにするものを鑿臣がヲを譯するにッ、アルの言を以てまたるは當らず物

遠し俗語では再びテナルといはねば分らずといひ去迄にて余が論の本旨にあらねばこれら細かき事以後日に譲りて余が本論にたちかへりて、の現在辭ならぬ証をあらべし。」と先づあつかましくも「余が論の本旨にあらねば」なき、負けをしみの苦しき口上を構へて護摩化しませらしたり。面白し。をかし。予が本誌第十五號に源氏物語夕顔の卷土佐日記の文を引きて説き示しには、平口したりと見えたり。返答出來ずと見えたり。窮したりと見えたり困うじたりと見えたり。面白し。可笑し。予が、その引証せる文の句格に就きて答辯すべきが當然なるに、よく論につまりたりと見ゆ。論難すべきふしあらば、その箇所、その條につきて攻撃すべき等なるに、言ひ開らきをするに由なく、切り入るべきみち無きがために、他の箇所、ぬけにげて、護摩化し逃ぐるうしろ手、いともをかしきは、腹よちり肝きらるばかり、はゝままるゝぞよ。かの屏風のうしろに逃げこみしざまに異ならぬぞかし。水の含瀬橋は、源氏物語一つ讀みし事無きをの子と見ゆ。その文義も、一向に通せぬものと見ゆ。もし源氏物語を熟讀し文義に達したる力あらんには、世間に耻ぢて出來得ざるわざなるに、抱腹絶倒にも、左の通り北斗第二十五號に、れいしく擔ひ出だして掲けたり。北斗雜誌いたす養氣會にも、國文圖語の學力ある人は、無きものと見えたり。もしその人あらば、拙き論説は載せられざる筈なればなり。天下に眼あり。世界に人あるを知らざるか。その説けるさま左の如し。(その箇所が變はり、章段が異なれば、文義句格も變はるものと思ひた、めるぞほゝゑまる、)

「鑿臣は右のテをテシモウテと譯して源氏物語の一部だけ漸く見たことありと夕顔の文をひけるか余も亦同書につきて林が説をもみぢの賀にとりて進撃すべし。其散りうせなんことも近きにあなるべし

すこしまどろむにやと見ゆる氣色なれば(源氏)やをら(源氏)いりけるに云々(源氏)直衣ばかりを取て屏風の後ろに入給ぬ中將云々屏風のもとによりては(源氏)とたみよせて云々(源氏)中將の帯をひきときてぬがせ給へば(源氏)ぬがじとすまふをどかく(源氏)ひきしろふ程に(源氏)綻はほろく(源氏)とたえぬ云々皆出給ぬ君はいと口惜く見つけられぬこと、思ひふし給へり云々はた袖もなかりけり云々中將宿直所よりこれ先つとむつけさせ給へどて推包みて遣せたるをいかで取りつらむと心やまし此帯をえざらましかばと覺す其色の紙に包みて(歌)とてやり給ふ立かへり 君にかくひきとられぬ。帯なればかくてすぎぬ。中とかこたんののがれ給はじとあり

といふ文中幾多のヌのあるにもか、はらすひとつだに現在辭としてツ、アルととくべき所あることなきはいかにぞや一つばかりならば誤字とも逃るべし又はこじつけもすべしかく數多あるヌを悉く誤字ともいはれまじ又こじつけもなるまじ

抑鑿臣が説の如くヌルをツ、アルと説かば屏風の後にいり給ぬは入給ヒツ、アルとなりて未だ入り終らざることゝなるべし若し入り終らざる時とならば中將の源氏を見現はさんどて屏風を故らにツホヌルの必用もなかるべし是れ源氏は既に屏風の後に入りはて給ひしに相違あるまじ若し又林氏

が例のこじつけに入りて未だいでねばやはり現在なりといふか然らば中將の源氏の臥所にいりしも入りて未だ出でぬをやをら入ける。とあるは如何是も現在としてツ、アルと譯すべしといふか妄も亦甚だしといふべし又源氏の隠れぬるを中將の見たれば現在にいへりといふか中將の臥所にいりしも源氏の見たることなれば是もやはりツ、アルと譯して現在格なりといふことを得るか何とてか同じく入りたる者を一方はけり一方はぬといへりや是れ共に時格の同じければなり是共に半過去辭なればなり(然れば何ぞ阿所共に同じぬるとかける。とかをつかはぬかといふ人もありながけりは事の過ぎ去りたるを驚く義ぬは天然に事の去りたるをいへるのみにて驚く意はなければ始は何人かは知らぬをまさか入りはすまじと思ひしに俄に入りければ源氏の驚きたる状を現はさんとしてけりとはいへるなり其他のぬぬるは是とは異なりよくく味ひ見るべし是ちの深理は決して鑿臣らが如き盡書堆裡の人の知る所に非ず)果して鑿臣が説の如く一方は半過去一方は現在とせば源氏物語の文はど、のはすどやいふべき是非言に非で何ぞ辭論でなくて何ぞ

其次の文に綻はぼろくとたえぬとあるヌもツ、アルと譯せば絶エツ絶エツアルとなるべし何時にたえはつるぞ直衣の袖は如何に長き物ぞか思へる愚も亦甚しといふべし。是等は俗語に譯せばヌとなるべし此ヌはタリのヌにして素とてあ約りたるものなれば俗語のラアルにこそ近けれ鑿臣の説のツ、にてはいと物遠し

其次は皆出給ぬなるが是も鑿臣の辭説の如く譯せば出カ、リテアルの意味となりて未だ出はてつる

どは聞えねば田デツ出デツシテアルの義か然らば其の次に口惜しく見つけられぬとあるはいかゞ先きに見つけられて種々のもつれもすみて(鑿臣の説に従ひて)そこをやら出か、りてあり乍ら尙ほ見つけられぬるは現在なりといふか杜撰も甚だしといふべし鑿臣は實にこれらの假字文だにときえぬ青諸生なるをなましくにもしひ言するは狂とやいはん忘とやいはんこれこそげに鑿臣のいへる如く外の事とはちがひけつく國體にも拘はる大事なる國語の事にしあれば彼様の杜撰をして古文に疵をつけ國體を損ひ後生を誤たんよりはむしろ文典の講義などはやめよゆめくかろかになせよ抑此ヌアルの現在格ならぬ事は執拗なる鑿臣にても既によく解かりしことならんが尙ほいへ出給ぬ君はいと口惜しく見つけられぬこと、思ひふし給へりとおなるが若し出給ぬのヌがツ、アルとして出、らと解かば源氏の君は出口に臥したりと思へるか源氏の君を非人乞食の類と思へるか愚も亦甚しといふべし妄も亦甚しといふべし若し又出で、からや、ありての事とせば見附られぬるのヌルを益々過去の意を強むることうづなし然れば何れの方より見るもヌルの現在格となるの理由なしといふべし

と、推し太くも、死ふとくも、言ひかゝりつるかな。あくまでも、推し太き奴かな。死ふとき男かな。學力の無きのみならず。心まで、拙きをのこに見ゆ。言へば言ふは、國語學に、識の淺きを、人に、蔑視せられ、論ずれば論ずるは、語法に眼の暗きを、世にあなづらるゝも、知らで、したり顔に、「同書につきて林が脱をもみぢの實にとりて」など、をこにも、知たり顔なるが、あきれて物も言はれ

す、肝きり、臍の皮が、よぢれるのみ。先づ片はしから順々に、しかりたふし、鞭くはへて教へくれてん。

「屏風の後に入り給ひぬ」は、入り給ひつゝアルなり。入り給ひての後はあらざるなり。何となれば、源氏の君が、屏風の後に、隠れ入り給ひ去ぬるさまを頭の中將が、目にチラと、觸れて、それど、見ゆる現在の現象を指して、言へるなればなり。斯る所を、已に入り果てたる後の事と心得過夫と、見るは畢竟語法に、暗く、文章をかくすべを知らぬがゆゑなり。中將直ぐさま屏風を疊み寄せて詰りよる急の場合、思ふべし。現在の時格にせざれば、文義整はぬなり。なほ

「綻はほろく」と絶えぬ」も 絶えつゝアルなり。これも、現在の現象を指せり。また

「皆出で給ひぬ」「口惜しく見つけられぬこと」も 皆出で給ひつゝアル 見つけられつゝアルなり。此の場合すべて現在の時格にせざれば、文義違へり。過去となしては、文章の趣味無し。また

「君に斯くひきとられぬる帯なれば、斯くて過ぎぬる中とかいたん」とあるぬるも、皆斯くひきとられつゝアル 斯くて過ぎつゝアルなり。「斯く」「斯くて」と言へる詞に、現在の意なること、著し。過去にあらざる事、ひきを俟たず。あるを、瀬橋が、僻説の如く、すべての

ぬ ぬる を「ヌ」を譯し、半過去の時格とするときは、文義と、のはず、意味通ぜざるなり。あるは、

屏風の後ろに入り給ひヌ

綻はほろくと絶えヌ

皆出で給ひヌ

斯くひきとられヌ

斯くて過ぎヌ

となりて、既往の事を後に言ふ事となり。今までのあたりなる目前の現象に、あてはさらぬを。若し水の舎瀬橋の子が、僻説の如く、「ヌ」を譯して、過去の時格とするときは、ぬ ぬるを言はずして、つ」と言はねば、文義と、のはず、意味通ぜざるなり。すなはち

入り給ひぬ は 入り給ひつ

絶えぬ は 絶えつ

出で給ひぬ は 出で給ひつ

ひきとられぬは ひきとられつ

過ぎぬ は 過ぎつ

とやうに言はねば、過去には、ならぬなり。ぬ とある限りは、現在の時格なり。畢竟斯かる場合の時格に過去と現在とを言ひ別かたんがために、

ぬゑる と つ つる と辭に二様ある必要は、あるなり。そもく辭の効用は、たゞその時と場合の言意文義の言ひ分ちを詳密に示すためにこそ、あるなれ。瀬橋が愚説や、先輩らが論や世間かいなまでのそそ語學者らが、説の如きは、素より言ふにも足らず、齒牙にかくるに足らぬ僻言なり。畢竟、國語國文の法も味も、實は知らざる輩が、多きなり。聖臣は、大聲疾呼して、國のため道のために、憎まれ者となり。卓然蕩雲爭霧の外に立ちて、舊式を破り、新式を立て、屹然獨り歩むものは、たゞ天下語學家の無識卑屈、苦むに堪へず、歎くにあまりあればなり。瀬橋をぢが如きは、罵り倒し、まかりつくるもの、實は愛するなり。喜ぶなり。予が説を破るほどの氣力ある人を世界に、需むるなり。予をして、こまらするほどの語學家が、世にあらはれ出でん事を、望むなり。飽くまで論じ、飽くまで答へよ。瀬橋をぢ、水の舍をの予。

さてその
ぬゑる と つ つる との差異辨別の例證をなほ古文古歌にとりて、さし示し教へくれば、
ぬゑる は「ツツアル」と譯して、經續現在
つ つる は「ラシマウマ」と譯して、終結過去
なり。その差別の例證は

(土佐日記) 年頃よく具しつる人々なん、別かれがたく思ひて、頻りに、とかくしつゝのゝしる、うちに夜更けむり。

上のつるは、年來親しく使ひ馴じみて在りし人の既往の事を指して言ひ、下のぬは、今目前に夜の更けむりゆく現在の現象を言へるなり。また同書十二月廿七日の條に
揮取、物のあはれも、知らで、おのれし酒を、食ひつれば、速く去なんとして「沙みちぬ風も吹きおんことを騒げば云々

これも、上のつれば揮取が、すでに自身は、酒を呑み終はりて、仕舞つた事を言へるにて、過去なり。下のぬは、目前に只今沙が満ち來る現象、風も、吹きおこるべき空の模様を言ふにて、現在の時格なり。

(竹取物語) こゝらの日頃思ひ詫び侍りつる心は、今日なんおちぬるとのたまひて、云々
これも、上のつるは、車持の御子が、玉の枝どりにおはして、三年このかた既往の苦難を言へるにて、過去なり。下のぬるは、今日なんと有るにて、目前さしあたりたる現象なれば、現在の時格なり。

また源氏物語に
(源氏権傳) 年頃は、世のわづらはしさに、おぼしけちつるを當代の斯く位にかなひ給ひぬることを、思ひのこを嬉しと、おぼす。云々

これも、上のつるは、前代の御世の事情を指して言へるにて、過去なり。下のぬるは、當代の云々と有るにて、今、目前の現象を言へる事、まろし。ゆゑに現在の時格なり。同書葵の巻に

御前にさふらふ人々、ものいそ心ぼそくて、すこしひき有りつる袖をも、うるほひわたりぬ云云

これも又、上のつるは、源氏の君が、葵の上の、かくれたまひての後に、院へまゐりたまふ時の事にて、既に涙が、すこしかわきかゝりて、その愁しみが、その當坐ほそで、無かりし事を言へるなれば、過去なり。下のぬは、また更に以前の如く「袖のうるほひつゝ在る」現象を言へるにて現在なり。また同書蓬生の巻に、

年頃、詫びつゝも、行きはなれざりつる人の斯く別かれぬることを、いと心ぼそうおぼす。云云これもまた、上のつるは、「年頃」と言ふに照應するにて過去なり。下のぬるは、「斯く」と言ふに照應するにて現在なり。また歌に

(伊勢物語下)
戀ひわびぬ種ひける藻に宿るてよ

我から身をも碎きつるかな

(新古今奉上)
眺めつる今日は昔になりぬとも

いまはの梅は我を忘るな

これも同じく、つるは、その當時の既往の事を言へるにて過去。ぬるは、方今の現象を示せるにて、現在なり。瀬橋、これにても、いまだそのわけが會得せざるか。そのけぢめが、腦裡に徹底せずや。これはやに教へ示しても、なほその差異辨別が理會し得ざるならば、國譯學は、念ひたえよ。思ひあきらめよ。いつまで苦學すとも、むな事なり。だめことなり。ひまづひやしなり。ひまづひしなり。なほ上に、さし示せるぬ。ぬるの例證を瀬橋が説なる過去の譯語「ヌ」と、遷臣の説なる現在の譯語「ナル」を、對比して、是非を判定せんに、左の比較の如し。

「年頃よく具しつる人々なん別かれがたく思ひて、頻りに、とかくのゝしる、うち夜更けぬを 夜更けぬ

「楫取、物のあはれも、知らで、おのれし酒を食ひつれば、速く去なんとて」
「沙みちぬ風も吹きぬ」とと騒げばを 沙みちぬ 吹きぬと

「こゝらの日頃思ひ詫び侍りつる心は、今日なんちちぬるものたまひて、を おちぬるものたまひて

のごと嬉しむおぼす。まかなひ給ひぬることを思ひのごと嬉しむおぼす。

「御前にさふらふ人々、ものごと心ぼそくすことひま有りつる袖をも、うるほひわたりぬ
をうるほひわたりぬ」

「年頃詫びつゝも、行きはなれざりつゝ人の斯く別かれぬることぞ、いと心ぼそくおぼす。を
別かれぬることぞ、いと心ぼそくおぼす。」

とやうに「タ」と譯して過去にするときは、上のつゝの「ラシマウタ」とあるに、打合はざるをや。共に既往の事を指して言ふ意味に混同して、文義明瞭ならずして、文意の趣味、深きを失ふものをや。

「タ」と譯して過去にするときは事、既に済みたる意と成りて、目前の現象に縁の遠き事となるなり。

ぬぬるは、漸々然様しつゝ、在る義に未來までも、かけて、現在の意味に説かざれば文義に背くなり。語法に、かなはぬなり。

藤本縣 國文熱心生(氏名、何とも無し此の人名、藤本市名とあらはされん事を乞ふ)の本誌十八號の督促に答ふ

林 麿 臣

「拜啓先生ノ開發新式日本文典ハ一時ニ天下ニ非常ノ高評ヲ得ラレシガ近頃ハ頓斗其發刊モ無之如

何ノ御都合ニテ有之候哉奉伺上候最初ハ正々堂々虎軍ノ勢ヲ以テ現時ノ文典大家ヲ何ノ其ノト壓倒セラレシガ今ニ至リ俄カニ何ア其氣力ノ衰ヘタル實ニ憐レ否ナ天下ノ爲メニ其人ノ絶命ヲ惜ムナリ人ハ言フ「最初非常ノ大勢ヲ長驅セラレシハ其兵糧饑山ニアレバナリ然レモ其日ヲ經レバ從テ其兵糧ノ蓄ヘ乏シクナリシヲ以テ斯クハ前日ノ勇氣ナシ」ト嗚呼此言實ニ其信ヲ穿チシモノト言フベキカ余輩ノ萬々希望シテ相待ツ處ノモノハ是レヨリノ以後ノ發刊ノ(文章論ノ續キ)開發新式ナリ余輩ノ切ニ願望スル所ノモノハ其文典ヲシテ世ニ活用セシムルノ覺悟ナリ今余輩ノ最モ困難辛苦專ラ研究セント欲スル所ノモノハ自是以後コノ日本文典ナリ今ニシテ其雜誌ノ不幸ニ遇フハ恰モ食物ヲ見セテ之ハ食物ナリト示教シ而シテ之レガ食スル法方ヲ教ヘザルニ等シ實ニ貴誌發刊ノ主旨ニ蓋與學理ヲ啓發シ一新創唱ニかゝる處蓋シ渺シトセズ又本編ノ開發新式日本文典脱稿ノ功ヲ奏スルヤ一朝ノ企圖ニアラズトハ其レ何ノ文典ヲ言フカ然ラザレバ何ア續々發刊セザルヤ實ニ吾輩ハ先生ノ雜誌ニ服從シ他ノ文典ハ絶而願ミザル勢ニマデ熱心シタリシニ豈ニ計ラン今茲ニ其熱心ノ効ヲ奏セシメザリシハ誠ニ々々残念至極ト言ハザル可カラズ嗚呼先生ノ高評ハ今日ニ於テハ其學理心底知ラレテ今ノはやりのモニー取りノ主義瞞着主義ノ部類ナルヤ迄ニ疑フマデ惡評セラレントス同時ニ他ノ文典大家ニ敗ラ取リシカトマデ醜評セラレントス先生以テ心意如何ト爲ス余輩ハ先生ノ爲メニ忠言スル所ノモノナリ速カニ速カニ續刊シ其名ヲ墜ス勿レ又天下ノ書生ヲシテ萬里霧中ニ彷徨セシムル勿

レ叶ハズンバ伏テ願フ當地ノ九州日々新聞カ或ハ九州自由新聞ナリ或ハ熊本新聞ニ於テ其廢刊ノ理由ヲ開カレ否ナ披露シテ天下ノ書生ヲシテ安心セシメマハラシトテ恐惶再拜」

廿六年四月二日

東京神田區猿樂町廿五番地ニ到ル

國文學院長

熊本縣熊本市

林 麿 臣 殿

國 文 熱 心 生

と端書に細密に書き、机上に飛來せり。國文に、熱心の人と見ゆ。感心す。汗顔に堪へず。本誌文典十八號の原稿、意外にわくれ、購讀諸君に對し、連刊の罪、去り所無し。ひとへに謝す。實は本誌文典、目下、學者社會の間に、望外の好評を得、本誌に就きて學ぶ者、日に月に多きを加へ、東京和漢洋の大家高士、過半同盟して、卓然新式文典新式歌文派の集合團體をなすに至れり。因て、これハ新式歌文協會といふを創立す。その計畫運動に、寸暇なく、つひに續刊今日に延滞せり。然れども自今奮てこれが主義を益々張り、彌々唱へ。國文國語に關する圖書講義録をも續々發刊し、語學の蒙昧、作文煩冗の弊を救はん。將來國家に志をいだける有爲の學生諸士、共に謀り共に奮つて文學社會の陋弊を一掃せんことを望む。文學の發達進歩を促かさんことを望む。今日は、劔を執つて屍を道にさらす時にあらず。筆を振つて命を國に盡すの時なり。天下有爲の學生諸士、予が志をつげ。予が志をつげ。

國語學(關根正直氏著)を批難す

林 麿 臣

近頃競ひ出づる國文學の新刊を驗するよその學無くその力無くして猥りよ世を誣ひ社會に媚ひ學生を惑はすの弊害日甚一日より甚し。實に痛恨措くあたはず學者社會の風儀うたて忍ぶに餘りあり。國文學のみちは國體維持のため重大の關係あり。みづから道を地よれどさんとするがごときは何ごぞや。苟も日本ごころといひだき道は熱心なるもの孰れかこれを憤らざるべき。ことを傍觀し措きて問はざるを待たず。

さて國語學の七十九頁よりへらく

「ぬ、これ、奈行變格活用言より、轉成せし助働詞なり。諸動詞の第五階より連りて、「行きぬ」「栴ぬる」「成りぬれ」などの如く云へども、奈行變格のみに續かず。

つ、これも、諸動詞の第五階より連りて、「推しつ」「捨てつ」「延べつ」の如く云ふ。

扱右の「ぬ」と「つ」とは同じく過去の辭なれども、其の中に、自動と、他動との差別あるが如し。古歌の辭に徴するよ、

鏡山いざ立ちよりて見てゆかん。年經ぬる身は老いやしぬると、「取りとむる、物にしあらねば年月をあはれあなうと過しつるかる。曉の霧も晴れぬ。」恨をぞ晴らしつる。

かしれば、「ぬ」は自動にして、「つ」は他動なる事、能く知られたれど、初心の人のため、易く示さん。左の表を見よ。

水散れぬ
花散れぬ
夜散れぬ
日散れぬ
人散れぬ
自動詞

水流しつ
花流しつ
夜流しつ
日流しつ
人流しつ
他動詞

然れど、此の區別古くより亂れぬと見ゆ。」

とは何とぞや、いかある據りどころありてか斯く明言しつる、いみじきひがことあり、關根正直氏は日本語法は、いまだその學び淺しと見ゆ、あまりに稚し、いふにも足らぬことをよくも公言せり、とはこの「ぬ」で「つ」との性質別用を左に例證を引きて掲げ示さん

「ぬの辭」は自動詞中の細別における天性に屬せるものなり、自動詞のみ謂ひては疎あり、意をくさす、たゞし時は經讀現在といふべきものを、明治二十三年八月二十八日出版せし程、谷野國語學に予が説き置きしを見よ

「つの辭」は自動詞と他動詞とに涉り人爲に關せるものなり、これを自動詞に限るものとすは、いふにも足らぬひがことぞ、左に徵せる例證を見よ、たゞし他動詞を徵するには「かならず」をの辭より言ひおこし來たる格あり、また自動詞は「かならず」がのほもぞや、かなんこそその辭より言ひおこし來たる格あり、こをもて辨別すべし、これは明治二十三年四月二十三日出版せし程、國文作法指針に委しく説きおけり

〔千載集夏の部〕 〔古今集秋の部〕 〔後拾遺集三〕

〔源氏物語未摘花の卷の歌〕 〔枕の草紙家はの條〕

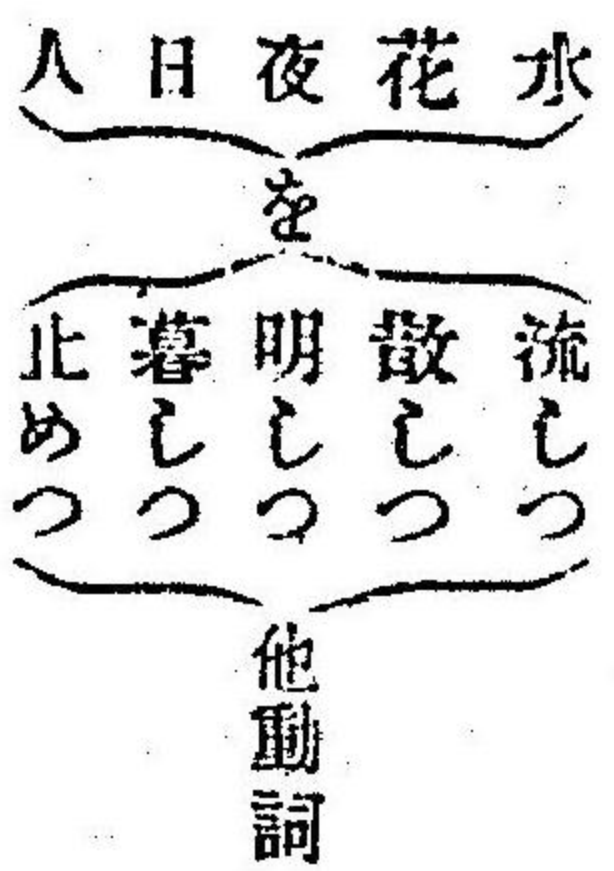
〔枕の草紙うれしきもの條〕 〔源氏物語賢木の卷〕

〔源氏物語賢木の卷〕 〔徒然草五十四段〕

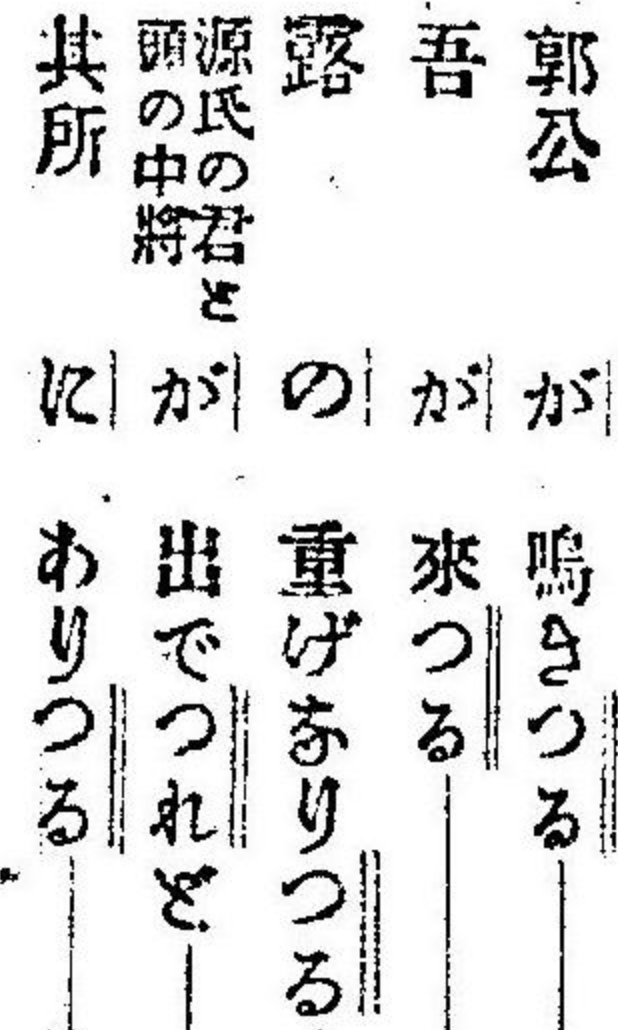
〔郭公なきつる方を眺むればたゞ有明の月を殘れる
「わが來つる方も知られず暗部山木々の木の葉のちりとまがふに
「いかならん今宵の雨に常夏の今朝だに露のおもげなりつる
「もろどもに大内山は出でつれど入る方見せぬいさよひの月
「ありつる花のもとにかへりぬたまへり
〔雨の〕 降りてこそ降るありつれど仰せらるゝも
「おはしましつる世こそ憚り給ひつれ
「大臣渡り給ひて云云、中將、宮の亮、なま待ひつや
「ありつる苔の筵にさみひて」

〔竹取物語〕

「のたまはせつるになんまゐりつる」といへば、
「とやらよ」がのほも」のごとき類の辭より言ひおこし來たる詞なる、なきつる來つるれもげありつる出でつれどありつる降るなりつればしましつる侍ひつやありつるまゐりつる」の「つるつれ」の辭は全く自動詞性のもので決して他動詞性のもよはあらざるあり、さるを關根正直氏はいかなる理由いかなる據りどころありてか斯くうけりて他動詞とは明言しつる、わらふべし、關根正直氏は歌文の古書を生徒に講述するよ」つるの辭「はすべて他動詞として教授せること知られたり、その生徒こそ不幸あれ、實に都合せらるべし、そはたま〜」をの辭より言ひおこし來たる他動詞性の詞のみ一つ二つ見だして、然る格ぞ、と臆断にてをこよも左表のごとく



斯くは定めしなるべし、近時かうやうなるをせ文典家はし、學生こゝろしてむだ骨折隙づひやしすな、なほ左表と對比して會得せよ



自動詞(人爲)

雨	が	降るなりつれ
院	の	御坐しおしつる
中將官	も	侍ひつや
の亮など		
自然	に	有りつる
内侍中臣は		奈りつる

さてまた「ぬの辭」を關根正直氏はこれが活用の時を過去として論ぜり、これまた違へり、この辭の時格は經續現在なり、經續現在とは過去より經續し來たれる現在性の時の格をいふ、左よ徴せる例證を見よ

- 〔古今集四〕
 - 〔金葉集九〕
 - 〔後撰集五〕
 - 〔後拾遺集三〕
 - 〔新古今集十二〕
 - 〔新古今集十八〕
 - 〔千載集六〕
 - 〔千載集八〕
 - 〔枕の草紙鳥はの條〕
 - 〔枕の草紙たとしへなきもの、條〕
 - 〔枕の草紙心もとなきもの、條〕
 - 〔枕の草紙ふぼつかなきもの、條〕
- 「秋來ぬと目には朗かに見えぬぞも風の音にぞかどろかれぬる」
「まづわれはあはれ八十ぢになりぬるをあふ隈川の遠ざかりぬる」
「こんといひし程や過ぎぬる秋の野になれまつ虫の聲のかなしき」
「ねぬ夜こそ數つもありぬれ郭公きく程もなき一聲により」
「海松こそ入りぬる磯の草あらめ袖さへ派の下に汚ちぬる」
「位山跡をたづねてのぼれども子をかも入道になはまどひぬる」
「妹がりど佐保の川邊をわけゆけば小夜か更けぬる千鳥なくあり」
「宮木ひく梓の袖をかきわけて難波の浦をどほざかりぬる」
「六月になりぬればおともせずなりぬる」
「夜のいとはかなく明けぬるにつゆねすなりぬ」
「只今をこそんとて出でぬる車まつほどこそ心もとなけれ」
「心ざしうせぬるはまことにあらぬ人とぞおぼゆるかし」

〔源氏物語帚木の卷〕

〔源氏物語空蟬の卷〕

「うつれとつひと思ひさだめすなりぬること」
「いま聞えんとて過ぎぬるにからうじて出でたまふ」
「とやうに遠ざかりぬる過ぎぬるつもりぬれ入りぬる汚ちぬるまどひぬる更けぬるどほざかりぬるなりぬるありぬ出でぬるうせぬる」の「ぬぬるぬれ」の辭は全く經續現在の時格なり、決して過去性の辭にはあらざるあり、よく思ひを潛めて味ひてよ、そはなほ〔竹取物語〕に
「かひは斯くありけるものを説びはて、死ぬる命を救ひやはせぬと書きはつると絶え入りたまひぬ」とあり、この「死ぬる命」といふは息いまだ絶え入らざる以前に在りて未來をさへかけて言へり、また〔土佐日記〕に
「追風の吹きぬる時はゆく船の帆手うちてこそ嬉しかりけれとぞていけのこまにつけつゝいのる」とあるこの「吹きぬる時は」の「ぬる」は今までのあたり追風の吹きつゝ在るを言へるうちじることば正に關根氏が言へるところとわひ反し正しく現在にあらすや、氏は〔竹取〕〔土佐〕など講義するにその「死ぬる吹きぬる」の句を過去の時として生徒に教へ導くにや、もし然りとせば歌の意通せず前後の文義史に解せざるをや、いとく雅し、語學家として共に談るに足らず
落合直文氏らも「ぬるの辭」を過去をあらはす助辭として中等日本文典に説けり、そは

○	ぎ	し	しか
に	ぬ	ぬる	ぬれ
て	つ	つる	つれ
たら	たり	たる	たれ
けら	けり	ける	けれ

とやうに「さししか」の全過去なる部類にさへ混入して論ぜり

語法を知らざるもまた甚し 氏は素より語學家にあらず をこにも文典などかきて合著などよくもことごとくしくものせしかな わらふべし たゞ先哲あるは他人の説どもを是彼れどりあつめたるのみに過ぎず編輯とはなごかせざる 直文氏らがごときはもとより齒牙にかくるに足らずといへども 學生の惑を解くため道のため止むを得ずいさゝか筆をけがしおくのみに 物集高見氏も「ぬるの辭」を「過去の時を見ず者」と改り 高津鐵三郎氏も過去をあらはす補助詞として

つ つる つれ
ぬ ぬる ぬれ
たり たる たれ
とやうに「つるぬるたる」を同時性のものとせり高津氏も落合氏らがたぐひなればいふにも足らずかとやうに「つるぬるたる」を同時性のものとせり高津氏も落合氏らがたぐひなればいふにも足らずかとやうになきやうなれどついでにいふのみ

質義答辯

林 夔 臣

謹んで林夔臣先生に申す 埼玉縣北足立郡 指扇村成成学校
鴨の歴短しと雖之を續がば愁ひなん、鶴の歴長しと雖之を断たば悲みなん、文字の添假字に於ける亦然です、其規則は係はらずして、妄にも短しとて之を續ぎ長しとて之を断つらば、其文章は殆其意を不可解の域に陥没さるゝとせう、試よ意を留めて今の新聞雑誌を見よ、此誤は落ち、此病は罹らぬ者殆一も有り升まぬ、豈官新聞雑誌のみならずや、學士博士の著述より三文小説に至る迄、其の添假字の法は叶へる者、亦殆一も無いでせう、コレ文學世界の一大欠典で無からう歟、余や之を憂ふると此は數年、屢論議する所ありしも悲しい哉吾地位卑く吾學力淺く吾名聲微なるより、更に滿天下幾十百万の病者を救極する能はず、獨快々として年を重ね來たが、昨年來風潮一變、俄に國文學の氣焔を煽ぎ幾種の國文雜誌講義録の出版を見るに逢ひ、余は是に於て大に望を屬し、據て以て此誤を正し此

「病を救ひ得可し」と心大に喜悅を懐いたが是亦其流に溺れ其毒に染まり、誤謬百出、余が望は殆絶え、余が慨は忽失せ、落膽と爲り悲哀と爲り、爲に兎毫を驅りて一篇の忠告文を「文則」の發行所、東京文章專修會へ贈たが馬耳東風更に少も顧盼する所とならなんだ、今や憤然として此文學界に屈起慨然として講述さるゝ林夔臣先生の日本文典第一號發行を開き、急ぎ之を購讀しました、が先生亦添假字は更は顧着されなんだと見えて、其誤謬は十指の數へ得る所では有りませぬ、失敬ながら今之と歴舉して先生の坐下は呈し升、幸に容るゝ所ありて此文學界の一大欠典を醫せられんことを敢て希望し升、

(甲) 鴨の歴短しと雖之を續がば非なり
(發刊の主旨) 蓋し(凡例) 新た(緒論) 詳か 則どらざる 表はす (第一章) 儘か 如どし (頭書) 苟も (第三章) 趣き 獨り 一つ 三つ 居わる 惜しむ 朗けき 速やか 穩やか 察やか 滑らか 朗か 圓か 豐か 仄か 遙か 雅び 重なる (頭書) 甚たし 訝かる 稚なし
(文則) 批離發行の主旨 猥り 隙費やし 拘はらざる (文則) 批離(係) かる 先き立ち 聊か 専ら 序に(廣告の一) 爲り 最も(回二) 少ナカラザレ 殆ント 否ナ 先キニ 即チ
(乙) 鶴の歴長しと雖之を断たば亦非なり
是は此講義録に見當りませぬ、「文則」「國文」杯ははいくらもあり升、序ですから其一二を御セウ
ペンに擧げませう、
有へけれ 消失すして 書つゞけ 人の倦ん 鳴はためき 富て 給て」
右質義のをち〜 ことわりあり 左に答辨せん
詳か 儘か 速やか 穩やか 察やか 滑らか 朗か 圓か
豊か 仄か 遙か 雅び 聊か

の類は本編第一號四十七頁象況名詞中の細目寫象名詞の條に講述せしを見られよ。「こはその語尾に「やかよからかかひびび」の辭がそはりて」を説けるごとくこの種の名詞を他種一般の名詞と種類を區分するがため語尾に添はる辭を殊更にあらはししあり。そは詞の組立および原義の上に然る理由あるをもちあり。また

一つ 三つ

の類は本編第一號五十一頁象況名詞中の細目數象名詞の條に説き示しがごとく「ひと」と「ひとつ」を書きわくるため「一つ」と「やうに」つを添へつるなり三つも同じ。こも亦然る理由あり。また

居わる 費やし 重なる 訝かる 表はす

の類は動詞の語尾轉用よ「爲る」「有る」「有り」「有ふ」詞を添へ合はせて活く格のものよて他種の詞と區分を立つるため斯く添假字をおくるなり。また

惜しむ 朗けき

の類も添假字と送るを正しとす。語尾の轉用に係かる格なればあり。自餘も各自そが理由あるなり。なかに

雅なし 如とし

のごときは活字の誤植検査者の過失なり。そは

雅し 如し ごとし

とやうに第一號中よ多くものせるを視査せよ。本編中このほかにも活字の誤植あり。左のごとし

- (正誤) 第二號形狀動詞の條百〇五頁十二行目 (よしけし 善)は よけし の誤
- 第三號動詞の時格の條百七十九頁二行目 (ばの辭を)は んの辭を の誤
- 第一號再版作用名詞の條二十五頁二行目 (活用名詞)は 活作名詞 の誤

右質義は埼玉縣の田島東洋氏なり。國語學に熱心の人と見受く

(學海指針社發刊の)教育中本會發刊に係かる

新式 日本文典に對する批評を難す

林 堯 臣

○ 新式 日本文典

林堯臣 國語學會事務所發行

「右は林先生自ら言はるゝが如く一新創唱世にありふれたる語學書とは大層違て居りまして名詞の中に年々時々杯の副詞も交りて居り遙か平か杯の形容詞も交りて居り在る居らんなどの動詞も交りてゐます必竟先生は國語の意味には達せられたる人なるべけれど論理學には餘り深からぬ人と見えて斯る一新創唱の種分けをば成されたので御坐りませう」と批評せり。誰人あるにか。その氏名開かまはし。語學の片端を惹ひよ耳ばさみたる人と見ゆ。いとかはゆし。あまものじりといふべし。左に語法の學理をさし示さん

年々 時々

のごとき詞は文章組立の上においては時ありて副詞の資格を有つ場合なきにあらねどそはその語尾に「に」の辭を添へて

年々に 時々

とやうに「てにをば」でめに言はねば完全なる副詞の格はそあらざるものぞ。稀にあるはたゞ連聲の便により時としてその「に」の辭の省かれるのみなり。斯かる場合も意味にはかならず「に」の辭が言外に含まる格なり。されば「に」の辭が語尾に添はらざる時は詞辭門中の範圍に屬せる詞にてすなはち詞の種類分上合名詞中實名疊合に算入せざるを得ざるあり。用例を示さん

共に花見し春の年々を思ひ出ださる

約せし辨償金の月々が苦勞なり
などやうの「年々月々」とは何の部目にか類別せんとする 固より名詞なることは「がを」などの辭が
語尾に添はるをもて確然名詞なるを証明すべきなり
また

遙か 平か
の類はその語尾に「のなる」の辭が添はらねば完全なる形容詞にはならぬ格なるものをや これまた
用例を示さん

見渡して距離の遙かを知る
道は平かがよし

などやうの「遙か平か」は名詞の資格なり 批評者はこれらを形容詞と見なせるにや 稚し また
在る 居らん

の類は動詞にてはあれど語尾に名詞を言外に籠め含めたる場合にはすなはち名詞の資格に變質する
格なり 是は名詞にのみ添はり動詞よりは添はらざるべき「がのはもぞやかこそ」の類の辭がそはるを
もて証明すべし 批評者は詞辭論すなはち詞の成立法中の範圍に屬すべき形状名詞象況名詞および
形状動詞と文章論すなはち詞の結合法中の範圍に屬すべき形容詞副詞との區別あるをだよ辨知せざ
るものと見ゆ

再林藝臣先生に伺ひ奉る

添假名に付先に御同申上候處御見捨も無く早速御答辨被下添く奉拜謝候されど御答辨を頂き候て尙
一層疑訝の念を深め候まじ重ねて及御伺候間何分御明答あらんやう奉希望候

詳か 儘か 云云十三語の類は「この種の名詞と他種一般の名詞と種類を区分するがため

語尾に添はる辭を殊更よあらはし、なり」どの御説明、ある程日本文典第一號四十七頁寫象名詞を御
講述あるに學者の便を料りて殊更よあらはすは別に可申筋も無之候へ共講述の便の爲ならずして
前にも申上候通り緒論及第一章杯にも御書き遊ばされ候は甚其意を得ず不都合之御事かと存候

一つ 三つの御答よ「ひと」と「ひとつ」とを書きわくるため」と被仰候へ共つを添へすも宜し
かるべき歟と存候、たとへば「錯亂混同一つだよ見るにたるものなし」此のつ。無きからとて誰かヒト
と讀み可申哉、三つも同じ、

居わる 費やし 重なる 訝かる 表はす の類は動詞の語尾轉用に「爲る」といふ詞と「有り」
といふ詞とを添へ合はせて活格のもの」と御説明被下候も小生淺學にして如何なる意味とも分か
り不申更し御細説を煩はし候、右の内、上ある三の添假字は或は可あるやも知らず候へ共下の二は
訝い表と働く字に付此處より仮字を添ふると至當固よりの儀と小生は確信仕候

惜しむ 明けき の類も添假字を送るを正しとす、語尾の轉用に係かる格あればなり」と、ナル
程サヤケキと申詞はサヤカども轉じ候故に添ふるを正しとすべきも、「惜しむ」はむのみにて可あ
らん歟、ナセと申せば惜と働く格にて有之故に候、「自余も各自そが理由あるなり」とは何事よ候
や、自余とは果して何を被申候や、右に擧げたるもの、外と云ふの意よ候や、然らば 蓋し 新た
獨り 荷も 趣き 重も 甚だ 猥り 拘はる 専ら 勢ひ 尙とふ 徒ら 況や 悉く 回はす
是等を被申候にや、如何なる理由あるものに候や、ヨモヤ活字の誤植にはこれあるまじ、抑添假名の
法則として語尾の種々よ轉ずる所の字には其轉ずる處より仮字を添ふると申事先生にも御承知の上
よ可有之、然るに右の字に添へたるは抑妄爲亂作とこそ存じ候へ、將先生一家の理由にても有之事に
候や

添仮名のとにききては埼玉の活版社より發行する「活」と申雜誌よ於て拙者講述仕候管に付、自説は此に吐露不仕、只御伺申迄に止め置候
次は御講述の日本文典第四號に付少々御伺申上候第四號の中は

舊	悲しけ	樂しけ	恐しけ
るる るる るる	るる るる るる	るる るる るる	るる るる るる
りらる	りらる	りらる	りらる

死ぬる 去ぬる 義理にそむくるなり、
杯申詞も有之候が、かゝる働も有之者に候や、何よ有之候や、淺學寡聞未承知不致候間何卒證を引き例を擧げて御説明あらんやう奉願上候
終に臨んで御忠告申上度候件は先生之御筆健に過ぎ御詞激に失し兎角文學者には不似合なる急激強暴の御口氣はアマリ宜敷事にも有之間敷候へば可成御ひかへめに御注意被遊候ては如何敢て御忠告申上候願首再拜

廿四年十月一日 埼玉縣北尾立郡指扇村 田島東洋

林先生玉卓下
右田島東洋氏が質義に對し答辨す
いま田島東洋ゆいよはあひしことなければ國語學にはなか／＼熱心の人と見ゆ 國の爲に志ふかき人と信ず 切實に意を用ふる人あり たのもしき人あり のちまたしくあはまはし いでねぶたき目もおしぬぐひ片はしつゝ答へ辨じてん

詳か 僅か

どもの(十三語)の類は「やからかさみ」などの辭が添はる名詞をば他の名詞と分類せんためにその辭を語尾に組立てたる一種の名詞として部目を立てつるゆゑ殊更に副假名せしなり 詞はその原義をたゞるときは大かた二言以上組立ちて一詞一語とされるを通例とすればなり たどへば「袖は衣手袂は手本梢は木末筆は文手」などのことし また

一〇 二〇
 の如きは「一人二人」 一枚二枚 「一本二本」などやうに物品の數を各種に呼び分くる格に對するその格の一種にて大方圓さに形づくれる品種にはすべて汎くわたりてその數を算へなすに用ふる稱にてすあはち「一圓二圓」の義の下畧あるべし 是は「一」は一居の畧言一枚は一平の義一本は文字の通りなり 一居を一人一平を一枚一圓を一箇と書くは漢字を充てたるのみ 實は「一」つ「一」ひら「一」もど「と」やうに書くべき量數名詞の格なれどすべてに汎く用ひなすところより習慣上「圓」の意義は至りて輕くなりゆき自然原數名詞の範圍中に混入せしものなり 然はされと素よりの原數名詞なる「二」と言ふ場合と變體の「二〇二〇」と言ふ場合とはおのづと用ひなす上に差別なきを得ざることあり たどへば

「節二節どがぞよ」

一つ節にうたふ

二目に見わたす 二目に見られず

一つ目小僧 本所二つ目に住む

などの類なり 斯く「一二三」と「一二三」との二様に書きわけざるを得ざる場合數えらすあり

また

居わる 費やし 重なる 訝かる 表はす

の中に「居わる」は「居る有る」のゑの反切なり「表はす」は然假名を送れるなり また「重なる」も「重ね有る」の反切なればなり たどへば

- 預け有る を 預かる
- 伏せ有る を 伏さる
- 當て有る を 當たる
- 換へ有る を 換はる
- 終へ有る を 終はる
- 治め有る を 治まる
- 染め有る を 染まる

埋め有る を 埋まる

止め有る を 止まる

とやうに副假名を送るにその動詞の語原を表はして假名を送るを正しとす 然らざれば詞の分類上において一目その種類を辨別するの便を失へばなり さきに濱田健二郎氏が著はし、副假字法規と謂ふが世に見えてはわれど語法にかなはざるをちゝ鬱からす 副假字も詞のすぢゝを正して送らまはさるものにとす

ざるを詞のすぢゝ成立にさしかまへ無くたゞ活格上の語尾の變化のみをもて副假字を送るときは書きなしの上に動詞の種類および成立を區分するに由なし

そもゝ動詞はその語原をおし究むればなべて五十音圖の「列」「さしち」にひみりる「とえ列」をけせてねへめえれえ」との二列にその語尾の係るところをもて語原と定めその動詞の種類を區分するを原則とせり されば四段に活くも上一段に活くも下二段に活くも上二段下二段か行一格と行一格な行一格どもに活くも皆すべて「有る」と謂ふ詞と「爲る」と謂ふ詞とが添はりて合はせ活くため語尾が數様に變化をねこすものと知るべし ゆゑに

居わる 植わる

は「居る居る居る居る」植る植る植る植る」の中に「る」のみが語原にてはかは皆「有る」が添

はりて變化をなせるなり また

預かる	は	預け	が	語原
伏さる	は	伏せ	が	語原
當たる	は	當て	が	語原
換はる	は	換へ	が	語原
終はる	は	終へ	が	語原
治さる	は	治め	が	語原
染まる	は	染め	が	語原
埋まる	は	埋め	が	語原
止まる	は	止め	が	語原

ありを知るべし 又は精しくは本編より逐次それが條々説明すべし 立ちて見られよ また

「費え」が語原にてそれに「爲る」と謂ふ詞が添はりて(元來は行一格の詞なれど他の詞は組み立つるときは活格を轉ずるが例なれば)四段活格も活けるなり たゞし「費えし」といふべきを「費やし」といへるなり 五十音圖の第四音すなはち「え」を「えり」といふべし「音」に係かる語尾は他の詞を連ね合はるべきは「えり」として第一音すなはち「えり」に

轉じ「あかさたなはまやらわ」の音に係かりて結びつくと一定の法とするをもつてなり そはすき

えに	を	あに	兄
たけやぶ	を	たかやぶ	竹藪
やせかたち	を	やさがたち	瘦形
てまくら	を	たまくら	手枕
いなば	を	いなば	稲葉
うはぎ	を	うはぎ	上着
あまがさ	を	あまがさ	雨笠
ひえみづ	を	ひやみづ	冷水
あれの	を	あらの	荒野
こゑいろ	を	こゑいろ	聲色

まの類を知るべし さて

はともくこの詞はその疑はしきを辨へんとする意味の語なり ゆゑに原義を解釋すればすなはち「言ふべき有る」の義にてその「んき」の辞の語尾「き音」を「有る」の語首「あ音」を「二音」といふ「切」か「と納まりて」か「となれる」といふを副假名に送りて詞かるべきは書けるなり また

表はそ

は詞の釋義「生れ晴れ爲」の義なれば語法上によれば表はそと書くべきが當然なれど「は表はそと言ひなすもの」の書き別けを立つるために止むを得ず表はすと副假名を送れるなり 斯くさきにたゞ

はりて變化をなせるなり また

預かる	は	預け	が	語原
伏さる	は	伏せ	が	語原
當たる	は	當て	が	語原
換はる	は	換へ	が	語原
終はる	は	終へ	が	語原
治まる	は	治め	が	語原
染まる	は	染め	が	語原
埋まる	は	埋め	が	語原
止まる	は	止め	が	語原

ありと知るべし 又は精しくは本編より逐次それが條々を説明すべし まづて見られよ また 費やし

は「費え」が語原にてこれに「爲る」と謂ふ詞が添はりて(元來は「一」格の詞なれど他の詞と組み立つるに依りて「活格」を稱するが例なれば)「四段活格」の活けるなり たゞし「費えし」とらふべきを「費やし」とらへるは五十音圖の第四音すなはちを列し「えけ」せとねへめえれるの音に係かる語尾は他の詞と連ね合はざるべきはすべて第一音すなはちを列し

轉じ「あかさたなはまやらわ」の音に係かりて結びつくと一定の法でゐるをもつてなり そはすあ

えに	を	あに	兄
たけやぶ	を	たかやぶ	竹藪
やせかたち	を	やさがたち	瘦形
てまくら	を	たまくら	手枕
いなば	を	いなば	稻葉
うへぎ	を	うへぎ	上着
あめがさ	を	あまがさ	雨笠
ひえみづ	を	ひやみづ	冷水
あれの	を	あらの	荒野
こゑいろ	を	こわいろ	聲色
あどの類を知るべし	を	さて	
詩かる			

はともくこの詞はその疑はしきを辨へんとする意味の語なり ゆゑに原義を解釋すればすなはち「言ふべき有る」の義にてその「んぎ」の辞の語尾「言」を「有る」の語首「言」の二音とあつて「反切」か「約まりて」かる」となれるを副假名に送りて詩かるとは書けるなり また

表はそ
は詞の釋義「生れ晴れ爲」の義なれば語法上によれば表と書くべきが當然なれどては表とて言ひなすものとの書き別けを立つるために止むを得ず表はすと副假名を送れるなり 斯くさまにたゞ

書き別けを要するために例外として一般の定則のほかはに定めたる副假名法にてたゞ書き別けの便を
ひねとせるのみの類なり また

惜しむ 朗けき
の類は「惜しむ」のし「朗けき」のけはすなはち「しきく」「けしけきけく」とやうに語尾の轉用して活く
格の語尾なれば送るべきが法に叶へるあり 是は「惜しむ」は「愛し見」の義「朗けき」は「返え氣如」の
義なればあり また

獨り 荷も 趣き 重も 甚だ 猥り 拘はる
専ら 勢ひ 尙とふ 徒ら 況や 悉く 回はす

の類はかほむね書き別けの便利上より定めつるにてこの中に接續副詞やうのものは重もに一字を
送る定めにて動詞の例とは異なれり 是は「荷も」は動詞の格によれば「荷しくも」と書べき例なるを
たゞもの一字を送れるが如し また「況や」は元來「言はんや」の義なれば「況はんや」と書くべきを
やの一字を送れるが如し さて「獨り」は「一居り」 趣きは「面向き」 甚だは「花果てやか」 猥りは
「見爛れ在り」 専らは「眞張りらか」 勢ひは「息鏡ひ」 徒らは「痛く徒らか」 悉くは「事事痛く」の
義にて語尾の轉用すべき成立の詞なれば副假名を送るを穩當とするのみならず一字は副假名を送る
方讀み亦すに便利なれば然ものせるなり また拘はるは「係り塞へ有る」 回はすは「圓る經爲」の義
なれば拘はるのほも回はすのほも語尾轉用の音なり ゆゑに送れるなり 尙とふは「痛く太見」の義
なればとを送れるは全く誤りしあり 素よりとは送らざること定めべきつるをゆくりなくふと過
ちしあり かのれは名詞を除くの外は すべて假字がきにせんことを主張するものあり ゆゑに副
假字はあへて意とせざるなり

愛知縣丹羽郡大山町 山田米三郎氏の質義に答ふ

林 麿 臣

謹ニテ林麿臣先生ニ質ス
開式 日本文典ニ於テ 結尾靈辭

天性決定 ぬ ヲ現在ノ時格
ト御講述相成候ヘドモ小生ノ考フル處ニテハ落合直文君ノ中等日本文典ニ既カレタル如ク「現在ニ近
キ過去」トナル方當然ナルカト存シ候 左ノ例ニ於テ先生ノ所謂「ツ、アル」ニテハ其意解セラレズ
ト存シ候

(土佐日記) 海に入れてえ飲ますなりぬ

(一) 同 () 物を飲み食ひて夜更けぬ

解シ得ベクハ御教示有之度候」とある條より先づ辨へてん この天性決定「ぬ」は 結尾靈辭の第一
則決定結尾中第五目の條に講述せし如く「去ぬる」の義にて事の目前に然成りつゝ往く天性の現象を
決定むる意味を言ひあらはす辭なり この「ぬぬるぬれ」の辭は動詞の「去ぬ去ぬる去ぬれ」と活く詞
より成り立ちたる辭なり されば

ぬぬる ぬれ

は取りも直さず現在の時格なる

去ぬ 去ぬる 去ぬれ

と活く動詞なるが他の動詞における續動格に添はりて活用法の役目をなす立ち場にかいて天性決定
の意味を言ひあらはす靈辭の地位に立てるのみなり ゆゑに時格においては動詞の「去ぬ」と靈辭の
「ぬ」と毫も差異無きなり (「死」のぬも全く同言にて「死ぬ」は「息去ぬ」の義なり 「死ぬ死」
「ぬ」が現在なるゆゑぬる」は現在にて過去には有らぬなり) とも「去ぬる」と

ふ詞の意味は目前に事の然ながら「去り往く」状の現象を言ひあらはすに於てすなはち今事が「去り往きつゝ有る」を目前に見る意義なり 潜思熟慮して深く玩味してよ 決して半過去には有らぬあり

(土佐日記) 「海に入れてを飲ますなりぬ」

の「なりぬ」は「なりッ、アル」と譯してよく文義は適當し其の意解し得られざることは更に無きものをや 何と云へばこの件りは正月元旦紀の貫之が一家族打集ひて祝宴するその實況をれいの寫真せしが如く書き取りたるものにて目前在りの儘の現象いまだ耐にも至らざる食事中「もしこの祝ひの席に白散があらば飲むべきを口惜しくもこの式に用ふることを得ずなりッ、アルことよ」と貫之が言はれしなり そはこの式に臨みて先づ第一に白散の無きを當日祝ひ物の不足中殊更に白散を海に失ひしを目前に打歎くさま見るが如し さるを過去の時格になしては却て義理通せず 文意解せざるなり 現在に近き過去など言へるは、國語學も國文も未だ解し得ざるをせせ學者の一家言のみ 感ふなけれ

(同) 書 「物を飲み食ひて夜更けぬ」

の「夜更けぬ」も「ふけッ、アル」と譯して文意適切によく叶ふなり 落合氏が説の如く半過去の時としては義理更にかなはぬなり 文意首尾かけ合はざるなり そはこの條は貫之に別れを惜しみて京へ歸る馬のはなむけに訪ひ來つる客に對せるあるじまうけの酒宴いまだ果てざる以前においてその居集される人々が歌の返しをばなし得ずしてたゞ物を飲み食ひするのみこそあれ 徒らに夜がおひくく更け往くよと目前の實況を書き寫せるなり さて後に「ある人の子のわらははなる云云」とありて歌の返しまつる段に漸々うつれる章段の前後味ふべし これまた過去の時格とする時はいかにしてか文意を解しその義理を會得すべき 笑ふべし 落合直文氏が中等日本文典にぬるの辭を「現在に近き過去」と断定せしは、甚しき、ひが事なり ぬるの辭の本性も効用もまた成立ちをも未だその何

たるを辨へ知り得ざるなり 全體落合直文氏は、未だ國語學や國文の深き學理なきはさばめては、居らぬ人なり 未だ國語學は一向幼稚の人なり 中等日本文典の杜撰、見るに足らざるを以ても、その淺學なるを證明するに足れり いでその中等日本文典中に、ひがことの甚だしき條々をかぞへ掲げて國語學に志す後進者のために止むを得ず辯難し以て世の學生の國文修學の方針を失せざらしめんとす(子コレマデハ此文典ヲ大方ニ論ジ取ルニモ足ラザルモノトナシテ繪テ)先づそのさし向きての質義より辨へてん

ぬる ぬれ
つ つる つれ

の二辭の差異辨別から始めて一々予が開發新式日本文典と中等日本文典とを互ひ比較し詳密に辯明せんに落合直文氏が説ける所を見るに

○ き し しか
に ぬ ぬれ
て つ つる つれ
たら たり たる たれ
けら けり ける けれ

とやうに「ぬるぬれ」の辭を「つるつれ」また「さししか」の辭と同時格のものとなし共に過去の時と断定し次にその差別を辨へて「ぬるぬれ」と「つるつれ」とは半過去ともいふべきものにして、現在に近き過去に用ゐるものなりと言ひて「ぬる」も「つる」も共に同時格のものとなし半過去の時と定めたり とはいたく非なり 甚だ違へり 予が開發新式日本文典に講述せし如く

ぬぬるぬれは 現在の時格にて 意は天性 決定なり

つつるつれは 半過去の時格にて 意義は人爲 決定なり

何とすれば「ぬ」の辭は「去ぬ」の義にて目前に事の「去り往きつゝ在る」意味を言ひ「つ」の辭は「果つ」の義にて既に事が「果てゝ過ぎつゝ在る」意味を言へばあり ゆゑに

ぬぬるぬれの辭

はその物その事が見るゝ現在に「去り往きつゝ在る」のを今目前に在り有りと見ゆる現象を指して言ふ たとへば古今集に

「秋來ぬと目よは朝かよ見えねとも」

風のおとにぞ驚かれぬる

この歌の秋來ぬは「秋が今目前に來つゝ在り」とは見えぬが「といふ意味にてその」見えぬは「はすなはち」見ゆる」の反對のみ ゆゑに時格においては全く同格なり されば「秋が今目前に來つゝ在り」と見ゆるが「といふに時だけの全く同格と知るべし」また驚かれぬるは「今現在に萩の葉などよ吹き渡る風の音に驚かれつゝ在る」といふ意味なり

源氏物語、花宴

「長閑やかよありぬるよ月いと明かうさし出でゝをかじきき」

同書葉の巻

「すこしひま有りつる袖ともうるはひわたりぬる」

枕草紙開卷

「晝よありてぬるくゆるびもてゆけば、すびつ火桶の火も白き灰がちにさりぬるはわりて」

同書異ことある物の條

「明けぬとあらばたゞ先づ入りぬかし」

同書家ばの條

「おんさうしに境算してみまのこもりぬるもいとめでたてかて」
とあるを味ひ見られよ こを俗言に譯して見んば

秋來ぬとは 「秋來ると」

驚かれぬるは 「驚かれる」

なりぬるに は 「成るに」

わたりぬるは は 「渉る」

ありぬるは は 「成るは」

明けぬとならば は 「明けるとならば」

みまのこもりぬるも は 「御殿籠るも」

といふに全く同じ意味にて正しく現在あり とあるを落合氏が説の如く半過去とする時は

「秋來たと」

「驚かれた」

「成つたよ」

「涉つた」

「成つたは」

「明けたとあらば」

「御殿籠つたも」

といふ意味となるなり 斯くては「つ」の辭とや、同じ意味になり「ぬ」の辭も「つ」の辭も俗言の譯があまり差別のなき意味となるなり 不都合にあらざるや、これを真正の學理をもてその差異を辯せば

「ぬ」は現在「つ」は半過去にして俗言の譯も判然と差別あり
ぬ ぬれ ぬれは 「ツノアツ」 ツノアル ツノアルガマア
つ つる つれは 「アシマウタ」 アシマウタデアル アシマウタガマア

とやうに二様に別かちて譯さざるを得ざるなり 國文を講ずるにも語法を説くにも真正の深き學理を辨へ知らざるは落合直文氏一人に非ず「ぬ」の辭の時格を半過去とあして説き居るは物集高見氏が初學日本文典にも大槻文彦氏が語法指南にも關根正直氏が國語學にも大和田健樹氏が和文典にも高津嶽三郎氏が日本文典にもその他これこれの新刊文典をもなべて同じこととなり素より 國語學者にもあらざる者が文典に無暗に文典を著作するは此の頃の流弊あり 中にも甚しきは漢學者があり 洋學者があり 實にその卑劣腹抱へてわらふべし いやしむべし 國語學の蒙昧幼稚なるは歎くにあまりあり などは「ぬる」と「つる」の差異を今弓射るよ矢の運用上に譬喩へておし示さん

ぬる は、目の前へに弓を射てその矢が現在に「飛び往きつゝ在る」を指してさひ

つる は、すでにその矢が的中りての後を指して弓を射果て、過ぎつゝ在る」をさひふあり ゆゑに

ぬる は 「ツノアル」を譯して現在
つる は 「アシマウタ」を譯して半過去

なり などは「ぬ」の辭の現在の時格なるを、たしかめんに

死ぬる は 「息去ぬる」

の義あり ゆゑに「死ぬる」のぬるも「ぬぬるぬれ」のぬるも共よ「去ぬる」の詞をれば時格もまた同格あらざるを得ざるなり さればこそ「去ぬる死ぬる」は共に活用基法が各行一格にて同格には有るなれ されば語脈格の縮動格たる「去に死に」から他の一般の格並みよ「ぬる」の辭を受けて「去にぬる死よぬる」とやうには添はらざる例なり この例は「行」一格の「有り」の語尾から「有り」を合はせて「有れり」とやうには活かぬと同理同格と知るべし その理由何となれば動詞の活用上に在りて或は語尾に辭を添へ或は他の詞を合はせ活かすこと有るは畢竟その意味に多少の變化を要するがためなればなり ゆゑよ同言合はせ活かに必要なきは論をまたざるなり

去ぬ 去ぬる
果つ 果つる

は共に動詞の資格に在りては全く現在の時格なること勿論あり 然れども

ぬぬる
つ つる

とやうに結尾辭の資格に性質を變じたる上は、その動詞の活用基法たる時格は共に趣きを轉じ常より動詞の語尾に添はり獨り立ちては活かざるを、もちまへとせり。ゆゑに「ぬぬる」「つづる」は語脈格の續動格に屬し動詞活用上に於いて意味を千變万化せしむる役目にて時格も自然その成立の語原に基くものなれば

去ぬ 去ぬる

は時格が現在ある上に意味もまた「目のあたり去につゝ在る」「現在の効用あるをもて結尾辭となりて

も、やはり

は現在格あるが當然の理勢なり 然るに

果つ 果つる

は時格は現在あれども意味が「既に果てつゝ在る」「過去の効用あるをもて結尾辭となりては、すまは

ち

つ つる

は現在と過去とを兼ねたる半過去格なるが自然の理勢なりと知るべし

さてまた「ぬぬる」と「つづる」との活性に差異ある理由を詳かにせんよ

ぬぬる

國民之友の批評

開發新式 日本文典第一號

林 斐臣 氏 講 述
國文語學會發行

○「目下日本文典の書かれ世に見えてはあれどその格法秩序さらに一定の規則なきがごとく錯亂混同一つだに見るに足るものなし、いまだ會て開發的教授法にかゝる無く修學するに一讀理想的に會得徹底せしむるの良書世にあるを見ず」

是此大膽なる著者が自ら明言せる所なり、然れども其言ふ所徒らよ獨斷的として、其發明の人を感服せしむべき者あるを見ず、中根、物集、落合、那珂、大和田等の文法家を罵倒し、「本邦語はひとり腦髓の發達に富み外國語はなべて腦髓不完全なることたとへば下等動物のごとし」と放言して、自ら蓄憤を據るものに似たり、兎も角此「日本文典」の如きは我が文法界よ一小波瀾を起すの風たるべし、但し是た、第一號のみ、其更に號を多く重ねるを待て我等が本著者の實力あるや否やを驗せん」とす、

國民新聞の批評

○國文語學院講義録の第一編第一號は林斐臣氏が講述せる日本文典を載せたり題號に開發新式の四字を冠せる丈ありて之を成るべく有形上より説述し最も理會し易からしめし者なり且卷末は文則批難の附録あり毎月一回發行定價十錢宛發行所は東京日本橋區大傳馬町二丁目國文語學會事務所

東京朝日新聞の批評

開發新式 日本文典

林 斐臣 講 述
國文語學會發兌

○林斐臣氏が院長たる國文語學院の向會にてハ講義録の第一として先づ日本文典を發兌せり冠せるは開發新式の四字を以てし開卷第一先づ「編中先哲語學家の會ていはざりし濫輿學理を啓發し一新

創唱にかゝるどころ蓋し極むとせず」といへる失蓋しき文字あり落合直文、大和田建樹、物集高見、中根漱等諸家の説所とは一々馬倒反駁して殆んど傍ら人をさが知し而して氏は立るに音聲論(詞の連聲法)詞辭論(詞の成立法)文章論(詞の結合法)の三部門を以てし又活作名詞形狀名詞方象名詞數形名詞等を新設せり其所論の正しきや否やは輕々しく論ふ可らず其意氣や真に壯なりといふべし尙附録として文則批難あるものを載せ先づ新刊の各種日本文典を批難せり

朝野新聞の批評

開發 日本文典

林 夔臣 講述

國語文學會發兌

●文は言を寫し言は心を伸ぶ文と心と相關係ある固よりなり然れども動物の運動行止の態を以て文章を喻ふるは其の大本に於てナトれ門違ひの恐みならずや何となれば體の行止は往々心の發作と相反するところあればなり

右朝野新聞社の批評者にして國文語學院より同社へ向けてさしれくれる答辨書左の通り

六月廿七日朝野新聞紙に本會日本文典に對し批評して曰く「動物の運動行止の態を以て文章を喻ふるは其の大本に於てナトれ門違ひの恐みならずや」とよくも嘴を入れたるかを言語は万有活物の眞影實況を口音より寫眞するものなりといふ理をだに知らざると見ゆ學識なきも程こそあれ文法と則とるに活物の舉止運營を離れて何れよか則とるの道ある又一體の行止は往々心の發作と相反することあればなり」とは何ごとや體の行止四肢の運用は腦の感覺より意識の發作よしたるがふべき理は天性の自然よして誣ふべからず犯すべからざる活理の原則あるぞ批評者は生理物理の學にさへ通曉せざる程の淺識を以て高遠精微の理を究むべき語學上よ嘴を入るはナト「れ門違ひ」よこそ批評者が論旨よよるときは文法は何より則とる何に喩ふるが標當と考ふるよか確答せよ誰なるか氏名を言へなほ詳細に第三號文則批難に筆を極め論を盡して其の濫與學理を説明せん其の道理を問ひつむべし

國會新聞 七月廿 批評

開發新式日本文典 第二號

大傳馬町國文語學會發行

開發新式の四字を冠し一讀日本の語法文則を理想的に會得徹底せしめんと欲すとの發刊の吹聴を以て第一號を公にし文則批難の部に於て大膽にも現代に於ける和文大家の著書を罵倒し世人を驚かしたる林夔臣氏講述の日本文典第二號出でたり名詞の類別より動詞の類別に至る説明の順序寔に秩然たり又附録文則批難に於ては中根大槻關根高津山諸氏の著書を批難して其幼稚あるを冷評せり林氏の此講述にして完結の期に及ばず和文學家の間に一論難の生ずる事あらんと思はる

自由 七月十 批評

開發 日本文典

林 夔臣 講述

日本文典の書固より其類に乏しからず然れども初學者をして其津梁を得るに苦しましむるは吾人の常に遺憾とする所あり今此書は開發的の教授法に依り語法文則等を指示したる者にして初學者と雖も容易に我文典を會得せしむるの讀義録あり

日本橋區大傳馬町二丁目國文語學會事務所より發行す

報知新聞 七月一 批評

開發新式日本文典

林 夔臣 講述

著者林氏篇首に署して曰く
そもく本會開發新式の日本文典脱稿の功を奏せるや一朝の企圖に出でしにあらずかの積年の苦學實に此一科に在りために榮辱を捨て糧食を忘れたる既に年久し編中先哲語學家の會て言はざりし濫與學理を啓蒙し一新創唱にかゝる所蓋し極むとせず請ふ本編世に有り觸れたる語學書の比と同視せざらんを他の文典講義録の例と我視せざらんをと附録には文則批難を題する者あり落合小中村、大和田、物集、那珂諸氏の著書を引き其誤謬不規則の點を擧げて辨難せり

時事新報 七月三 批評

日本文典 日本橋區大傳馬町二丁目國文語學會事務所より開發新式日本文典の第二號を發刊せり其發行の主旨に「目下日本文典の書かれ世に見えてはあれどその格法秩序さらに一定の規律なきがごとく錯亂混同一つだに見るに足るものありしやだ曾て開發的教授法にかなへる無く修學するに一讀理想的に會得徹底せしむるの良書世にあるを見ず」と記載したり其の自ら任するの大なるを見る可し但し其論する所果して其任する所に負かざるや否や具眼の人あるべし編輯者は林堯臣あり

教育報知 七月 批評

日本文典 毎月一回 定價十錢
本編は初學生をして日本文典を理想的に會得せしめ且つ從來の不規律なる文則を排し大に推理開發の新式を取るの旨趣なりといふ又著者頻りに那珂落合小中村中根等諸氏が著されたる文典を口を極めて罵倒せり兎に角一讀して損毛はなし

報知新聞 八月 第二號 批評

開發新式日本文典第一編第二卷

林堯臣 講述
國文語學會發行

概略は其第一卷の評題に於て之を言へり新式々々と唱へ來る者の中是だけは真に一種の新式を具する者の如し附録文則批難天下知名の士を相手に論難指摘せる所意銳にして言切あり

亞細亞 八月 批評

開發新式日本文典

林堯臣 講述
國文語學會事務所

本書は林堯臣の講述せる所にして氏が自から謂ふ所によれば氏が斯學に熱心なる忠實なる頗る多とするに足るものあり就中欄上に各人の説を參考に供へ且つ卷末に各種文典の批評を載せたるが如き彼此研鑽發明の資たる多し只罵嘲の言多きは何事ぞや蓋し斯く熱心ある著述は對し輕々に批判せんは他日日本書完了の時仔細研究する所あらん

二月廿九日發兌早稻田文學批評

林堯臣氏の「日本文典」

國文語學院講義録「開發新式日本文典」は已に第一編第八號に及びたり著

者林堯臣氏その凡例中にわきまへて曰く「本編はつとめて初學生をして日本文典を一讀理想的に會得し易く記憶し易からしめんことを目的とすされば從來在り觸れたる不規律錯亂的の舊式を廢し推理開發的の新式を立て、組織せり」と又曰く「詞の性質効用により名目を改稱しあるは新たに名を命せしところ尠からず名は實の質なりその性質効用に適切せるにあらざれば記憶せしめんにも會得せしめんにも開發的の教授法に反し學生講習の不便尠からねば止むを得ざるなり」とはば此書の嶄新なる面目を豫想すべし

卷を開くに及びて誰か三たび驚かざらん一たびは著者の大言に驚き一たびは命名の異やうなるに驚き一たびは分類の繁なるに驚く附録なる「文則批難」の主旨に曰く「近時國文語學の新刊多しといへどもこれが品質いかかを見れば杜撰粗雑たゞ一目的もとに批難すべきもの殊に文典に掛しとせず甚きはきのふけふのえせ學者その學なくその力なくして猥りに世を誣ひ社會に媚び學生を誑はすの弊害日は一日より増しとせず尠も責を教育に任じこれが眼を具へその力を有せる限りは目下の世運陰然道を下に慨み内に憤るの日にあらず云々」とこれ豈壯語にあらざや又發刊の主旨に曰く「目下日本文典の書かれ世に見えてはあれどその格法秩序さらに一定の規立なきが如く錯亂混同一つだに見るに足るものなし」とこれ豈大言にあらざや況んや今人を罵り古人を破して傍人無きが若きをや讀者の先づ驚くはこれら壯語大言の故なり

さて卷を開きて本文に入ればたちまち「驚き」と命じたる一種奇異の新字面に衝突すこは從來の手爾葉の區域を擴めて總ての係り結びはいふに及ばずありとある語尾をも總稱せる詞なり人豈その新趣向に驚かざらんやこれを第二卷の端緒とすやがて名詞の條下を續むに及ては更に分類の繁きに驚く名詞の種類(代名詞の種類をも含むれば)二十一品、これに合名詞の種類をも併すれば總計四十七品に

時事新報 七月三 批評

日本文典 日本橋區大傳馬町二丁目國文語學會事務所より開發新式日本文典の第二號を發刊せり
其發行の主旨に「目下日本文典の書かれ世に見えてはあれどその格法秩序さらに一定の規律な
きがごとく錯亂混同一つだに見るに足るものなし」また曾て開發的教授法にかなへる無く修學する
に一讀理想的に會得徹底せしむるの良書世にあるを見ず」と記載したり其の自ら任するの大なるを
見る可し但し其論する所果して其任する所に負かざるや否や具眼の人あるべし編輯者は林堯臣あり

教育報知 七月 批評

日本文典 毎月一回 定價十錢
本編は初學生をして日本文典を理想的に會得せしめ且つ從來の不規律なる文則を排し大に推理開發
の新式を取るの旨趣なりといふ又著者頻りに那珂落合小中村中根等諸氏が著されたる文典を口を極
めて罵倒せり兎に角一讀して損毛はなし

報知新聞 八月 第二號 批評

開發新式日本文典第一編第二卷
概略は其第一卷の評題に於て之を言へり新式々々唱へ來る者の中是だけは真に一種の新式を具す
る者の如し附録文則批難天下知名の士を相手に論難指摘せる所意銳にして言切あり

亞細亞 八月 批評

開發新式日本文典
本書は林堯臣の講述せる所にして氏が自から闡ふ所によれば氏が斯學に熱心なる忠實なる頗る多し
するに足るものあり就中欄上に各人の説を參考に供へ且つ卷末に各種文典の批評を載せたるが如き
彼此研鑽發明の資たる多し只罵嘲の言多きは何事ぞや蓋し斯く熱心ある著述よ對し輕々に批判せん
は他日日本書完了の時仔細研究する所あらん

二月廿九日發兌早稻田文學批評

林堯臣氏の「日本文典」 國文語學院講義録「開發新式日本文典」は已に第一編第八號に及びたり著
者林堯臣氏その凡例中にわきまへて曰く「本編はつとめて初學生をして日本文典を一讀理想的に會
得し易く記憶し易からしめんことを目的とすされば從來在り觸れたる不規律錯亂的の舊式を廢し推
理開發的の新式を立て、組織せり」と又曰く「詞の性質効用により名目を改稱しあるは新たに名を
命せしところ尠からず名は實の實なりその性質効用に適切せるにあらざれば記憶せしめんにも會得せ
しめんにも開發的の教授法に反し學生講習の不便尠からねば止むを得ざるなり」とはば此書の嶄新
なる面目を豫想すべし
卷を開くに及びて誰か三たび驚かさらん一たびは著者の大言に驚き一たびは命名の異やうなるに驚
き一たびは分類の繁多なるに驚く附録なる「文則批難」の主旨に曰く「近時國文語學の新刊多しとい
へどもこれが品質いかが見れば杜撰粗雑たゞ一目的もとに批難すべきもの殊に文典に對してせず
甚きはきのふけふのえせ學者その學なくその力なくして狼りに世を誣ひ社會に媚び學生を惑はすの
弊害日は一日より甚しとせず苟も責を教育に任じこれが眼を具へその力を有せる限りは目下の世運
陰然道を下に慨み内に憤るの日にあらず云々」とこれ豈壯語にあらずや又發刊の主旨に曰く「目下日
本文典の書かれ世に見えてはあれどその格法秩序さらに一定の規立なきが如く錯亂混同一つだ
に見るに足るものなし」とこれ豈大言にあらずや況んや今人を罵り古人を破して傍人無きが若きを
や讀者の先づ驚くはこれら壯語大言の故なり
さて卷を開きて本文に入ればたちまち靈辭と命じたる一種奇異の新字面に衝突すこは從來の手爾葉
の區域を擴めて總ての係り結びはいふに及びずありとある語尾をも總稱せる詞なり人豈その新趣向
に驚かさらんやこれを第二卷の端緒とすやがて名詞の條下を續むに及ては更に分類の繁きに驚く名
詞の種類(代名詞の種類をも含むれば)二十一品、これに合名詞の種類をも併すれば總計四十七品に

及べり是豈繁多ならずと況んや新たに此書に接する者が先づ三驚して逡巡するは故無きにあらず
 さりながら讀みて第八號に及ばず誰かまた前の三異象の止むべからざる所以を覺らざるは著者は舊
 式を打破して新式を創唱せり衆邪を破せんか爲には疾呼せざるを得ざるべし著者はまた新組織を興
 せり舊組織と混ぜざらんが爲には特殊の名目を用ひざるを得ざるべし著者はまた詞の原品を緊縮し
 て名詞 動詞靈辭の三種のみとなせり勢ひこの三種を細別して幾十種とせざるを得ざるべしわづか
 に三異象を見て三驚を喫し卒に此書をしりぞげんとするは讀者の誤ならん
 國語異なればその文典も殊ならざる可らざる勿論あり英佛の文典を應用して強ちにわが國語を律せ
 んとせばなか／＼に錯亂の弊を生せん著者こゝに見る所ありてか形と質とを混じたる從來の式をす
 て多數の詞品に分類せる外國の式をもすて、新たに特殊なる組織を設け國語の全軀を三品詞に分て
 り著者が分類によればありとある俳言(語尾の變化せざるもの)は皆名詞なり人、馬、山、川、山城、義
 貞、燈、報、白、黒、辛(食物)等はさらなり「咲くが嬉しき」の「咲く」在るべきを信す「在るべき」寒さ
 を知る「の寒さなごこと」く實名詞にして吾、汝、これ、それ、誰、某、何、いくら、等はいふに及ばず
 「事を執る」の事、物を見る」の物など皆代名詞にして俳言の部に屬し又年々、くさく、諸君、兄上、御
 代、曲者、何人、其頃、山奥、手輕、間近、月見、川狩、大日本、奥山、なども總て合名詞にして俳言に屬せ
 り其分類は煩瑣なるが如しと雖も其本軀は極めて單純にして解し易し案ずるにその分類の煩瑣ある
 は一つは原品詞を三種にのみ限れるより生じたる自然の理勢にして一つは初學の便宜を圖りて著者
 が或は詞の形により或は詞の本性により或はその特殊なる役目によりて綿密に分類せるより止むを
 得ずして出來せるものならん若し語尾の變化する詞より化して俳言となるものを總括して一種の實
 名詞とせられんには「流る流れん」のすわりたる流れ「咲くが嬉しき」の咲く「ゐるるれ」のすわりたる
 井「白く白く」のすわりたる白「寒さを知る」の寒さ等は居作、活用、居存、居形、活形、などいふ特
 殊の名目を設けずとも一類の下に括することを得べきか、さもあらばわれ著者の本意は強ちに分類

を簡略にせんとするにあらざるは初學者をして一目の下に詞の本質と効用とを双つながら釋然とし
 て一時に會得せしめんとするにあらざるがごとし

語尾の變化する詞にして事物の動作を指すものを著者は動詞(用言)と名づけ文意起因して章句文脈
 の死活斷續を司る最も重要な辭を靈辭(神辭)と名づけたり思ふに動詞靈辭の二條は殊に著者が丹
 精の存する所ならん分類の方法は名詞の條に同じく木質と効用とを一舉して會得せざせんとの本意
 なるが故に名目は頗る繁雜ありといへども學理は貫通して一絲も紊れず漢語に國語加はりて動詞と
 される詞も卑俗ある近世の國語も此分類の中には含まるべし「暖し」朗けき「白く」黒し「物する」
 なども皆動詞の一類なり「往く」返す「泣く」は緩性重合の動詞にして「往きにゆく」
 「泣きに泣く」等は急性重合の動詞なり、さて動詞の活用基法に移りては著者また大呼して曰く「從來
 語學家がたゞ動詞語尾の變化のみにて靈辭すなはち」てにをば「添はらざる活きを活用法として論せ
 るはいみじきことなりそは何となれば靈辭添はらざる語尾の變化はたゞ僅かにその活用の基礎
 をなせるに過ぎざるものなればなり」と此に於てや著者は動詞の活用をもて後に結尾靈辭と相須ち
 て文章の意味を完成すべきものとなしその活用の方法を名づけて活用基礎となし時の過現未と語尾
 の斷續とを辨すること頗る詳かなり、さてまた第五號なる第七章に至りては著者が國語の精髓と
 なせる靈辭すなはち神辭の門に入り靈辭を分ちて起首靈辭、結尾靈辭、關係靈辭、接續靈辭の四品と
 なし起首靈辭を再別して舉止(が、の)招喚(よ、や)反對(は)對稱(も)指示(ぞ)詠歎(なん、なも)疑問
 (や、か)拔群(こそ)の八種となし結尾靈辭を再別して決定、想像、推測、將然、不然、反轉、命令、感歎
 の八種となし更に此八種を細別して決定、結尾の中に到來(けり)落着(たり)天性(ぬ)人為(つ)既往
 (き)作爲(せり)目前(なり)將來(べし)の八目を置き想像、結尾の中に自然(めり)將來(らん)既往(け
 ん)の三目を置き推測、結尾の中に目前(らん)既往(けらし)の二目を置き將然、結尾の中に人為(ん)天
 性(なん)試乎(てん)思欲(ばや、まほし、たし)志願(しが、もが)の五目を置き不然、結尾の中に目前(ず、

ぬ、ね)將來(じ、まじ)の二目を置き反轉・結尾の中より擧止(かば、やは)想像(めや、らめや)の二目を置き命令・結尾の中に指示(よ、てよ、や、を、てを、ね)恩顧(なはん、なん)禁止(なかれ、な、な〇〇)その三目を置き感歎・結尾の中に嘆詠(かな、かや、か)悲哀(はも、はや)の三目を置き都合二十九目の多きに及べりさて又關係・靈辭を再別して獨活・管活の二品となし獨活・關係を細別して歸着(に)方位(一)發程(より、から、ゆ)到着(まで)の四目となし管活・關係を細別して使用(花を折るのを)憑據(風よ花を除きて吹けのを)の二目となし(都合六種)又接續・靈辭を細別して所屬(の、が、なる、つ)對比(と)差別(さへ、すら、だに)限局(のみ、ばかり)背違(夜は更けざるに月は傾きぬの、使を遣りしをなどか來ぬのを、來んと言ひしが來ずのが)悻悻(とも、とも、と)約束(花咲かば告げんのは、夜が明くれれば寢ては居られずのは)追疊(軍に乗りて急ぎて走るの、兼帶(つ)、ながら、がてら)不然(吾は往かて人を招くので、身のはどを知らず者れりのす)の十目とさせり靈辭總計五十餘種、誰か其繁きに驚かざらん、若し此分類が他の分類の場合に於る如く一品詞のうち十箇の語を含めるものならば人皆その煩に堪へざるべきがその實これら五十餘種は詞品の分類をあらはせると同時に各詞品の定義をも示せるものにて大かたは一語よして一品をなせるものなり他の分類の場合に於ては分類の名目を學びたる上に更に効用と本質とを就きてのくさくさの説明を要すること問々あれど著者の分類はたゞちに解釋(定義)の用をも兼ねたり學習の便宜上よりいはば決して繁といふ可らず吾人はむしろ著者が剖析の能力が富みたるとその學理のよく整ひて全辨に透徹貫通するに服す

吾人も國語學に幼稚なれば此書能くわが國語の巨細を掩ひ「國語學上の万象を網羅し得たるかあらぬかは吾人が斷言する能はざる所なりさながら著者が新文典に秩然たる系統在りて理に練りて讀みもてゆけば初身の學生といへども國語の本質と効用とを知るに苦まざるべしといふことは猶豫せず断言せんとす著者の分類の徹頭徹尾井然たる理論に基けるを信すればなり殊に判然たるは靈辭の解なり、けり、たり、せり、なり、つ、ぬ等の靈辭を解釋して一つづつに俗譯をも加へたる、周密にして明晰なり快刀をもて瓜を斷つが如しと評すべし「古き歌文どもを引かんことは初學生を導く教科

書類には却て煩雜に失し益虧し」といふことわりはあれども若し三くさ四くさの例證の一目の下に著者の説を固うするものあらばいよくよからん

夫れ學理上の戦は君子の争をらんを多數の國文學諸家はなぞて著者の駁論に答へざる、吾人初學者をして多岐に泣しめんが國文學者の志か吾人大に感ふ、著者もまた少しく大言と壯語とを收めて堂々の陣を張りたまへ猛犬の門守りて泣く聲のはしたなきが爲に友若し腫を返へさばぬしも嬉しとはおぼさぬなるべし

十月十七日國民新聞批評

開發新式日本文典 日本橋區大傳馬町二丁目 國文語學會事務所
これ文法學者林壘臣氏が多年の苦思に成りし者前號に續て所說詳精解明懇到也世の文法を獨修せんとする者は大なる便益を得べし定價は一冊十錢宛

十二月十九日自由新聞批評

國文の粹を發揮するの難きは其の玄遠なるが爲めにあらすして寧ろ其の平易切近なるが爲めに存せるもの多し又た國文の弊を匡濟するの難きは其の語格の末に於ては「言葉の玉緒」の奴隷と爲り其の主義の上に於ては「桂園一枝」の剩糖を嚼りて新面目を拓き得たりと爲すの失に流れる者多きに存す故に其名は之を濟ふと云と雖其實矢張り弊害の上塗を爲すに過ぎず且夫れ今日の要務は發揮に在るよりも匡濟に在る者多く開拓に在るよりも調和に在る者多し今林氏の講述にかゝる日本文典を把て見る全然我意を獲たりとは謂ふ可らず然れども大膽にも自ら懐くところの新主義を創始して(若し創始の語を評せば)前古人をく後來者なき底の新式論を唱道す余何等が講述者の腔子中に一の默契するところありて然るかを思ふ若し夫れ稍や他の群文典より出て此の文典に來らば得るところ必ず渺渺ならざるべし余輩は今日に此等新式の好雜誌と得たるを歡び寧ろ他の雜著を排して此の書に來らんとを續者に薦めざるを得ず是れ決して單純なる好奇の念より徒らに新を喜びて然かく言ふものにあらざるなり

宋 黃 堅 原選
元 林 以 西 增補
日本 川 島 樸 坪 纂評

纂評古文眞寶

前集 二冊 賣價三拾三錢 郵稅六錢
後集 二冊 賣價三拾三錢 郵稅六錢
文ハ經國ノ大業、不朽ノ盛事ト、宜ナル哉、之レ則チ賢豪俊邁ノ士ガ、心肝ヲ雕琢シテ從事シタルヲ以テナリ、眞寶ノ書タル世ノ文士ニ贈送スル久シ、然リト雖共、又簡古深奧、驟カニ解シ易カズ、此書ハ則チ諸家ノ評語切實ナル者ヲ彙メ、讀者ノ便ニ供セント欲スルヲ以テ、誦讀措カザレハ、濫與ヲ親ヒ得テ、文辭ノ眞寶タルヲ解スルニ至ル、請フ諸君購ヘ以テ眞寶トセンコトヲ

福井 光編輯
川島梅坪刪定

修身叢話

上下

賣價金三拾一錢
郵稅金六錢

修身ハ人タルノ道ナリ、身ヲ脩メザレバ、以テ人タルヲ得ズ、近世人皆功利ニ趨リ、德義ヲ賤ミ、禮法ヲ棄テ、將ニ究極スル所ナカラントス、是ニ於テ、修身ヲ公ニシ以テ世ヲ調スルモノ、尠ナカラス、此書ハ其中心ニ和漢古ヲ聖賢ノ嘉言懿行ノ美、然タリ故ニ、採テ以テ子弟ニ誦讀セシメ、メバ、知ラズモ、民ヲ化シ、俗ヲ成スニ至ラン、希クハ教育ノ大任ヲ受ケ、賜フ父母、覽閱シテ、以テ其子ニ仁義禮讓孝悌忠信ノ道ヲ明示セラレンコトヲ

貝原益軒先生原著
川島梅坪先生校訂

家道訓

上下

賣價金拾三錢五厘
郵稅金四錢

修身齊家ハ兒童教育ノ本旨ナリ、益軒先生ノ家道訓、洵ニ能ク其道ヲ盡セリト謂フベシ、此書ハ其中ニ就キ、繁蕪ヲ去リ、要領ヲ撮リ、撮リシモノナレハ、小學ノ蒙童ヲシテ一讀ノ下、修身齊家ノ大要ヲ知ラシムルヲ猶鏡ニ對スルガ如ク、兒童モ亦一タビ、細ケバ、玩味以テ、卷ヲ掩フ能ハザルノ感ヲ生セシムルニ至ル、實ニ家道訓タルノ名ニ負カザル良書ナリ

諸新聞評

國民新聞の批評 (二十四年十月十七日)

新式日本本文典 (日本橋區大傳馬町二丁目)

これ文法 林 聖臣 氏が多年の苦思に成りし者前號より續て所説詳精解明懇到也世の文法を獨脩せんとする者ハ なる便益を得べし定價は一冊十錢宛

毎日新聞の批評

開發新式日本本文典 日本橋區大傳馬町二丁目 國文語學會より毎月發兌する日本本文典は和學者林聖臣氏の講述に係る者にして文法原則、性格等を詳述せる者なれば日本本文典の神髓を窺はんとする人は一讀して然る可し

東奥日報の批評 (廿五年四月二十日)

日本本文典

國文語學院々長林聖臣先生の講述ある日本本文典昨年東京日本橋區大傳馬町二丁目二十二番地國文語學會事務所より發行して今や數多の號を重ねたり。突如として顯れしより人々之を怪しかり又知らぬ人も少なからず。物は成るの日に成るにあらざりしや又一朝の企圖に出でしにあらざるべし。○今めに寝食を忘れ榮辱を抛捨て今日服稿世に公にせしや又一朝の企圖に出でしにあらざるべし。○今日に坐し憂慮措く能はず國學の完全と後進を思ふの一念の極此美學ありしならん。其主意とする所は此點にして一讀理想的に會得徹底せしむるにありて書中濫與學理を啓發し一新創唱にかゝるところ蓋し尠しとせず。緒論、詞評論より及ぼし章、節、款、目と明細に區別して頗る丁寧懇切を盡し和學同志のある人は必ず一讀して舊套を脱して新衣を着くべし而して故人或は舊著に對し時を打つて火を發する如く完全の域に達せんとするの宿志を述ぶるの精神よりと思は、有難しと御禮を申すも彼は世人の如く喧々するま及ばぬ事なり余輩和學の熱心家此書の益隆盛に阪路の歩を進めんと又世人の必ず之を一讀せんとを希望するなり日本人として日本の文法を知らず漢洋の外ハ學あしと誤想するは自家を度外視して隣家の寶を算ふるに異ならぬ不忠心を知らず。豪傑としいへは人の痛さは三年もこらへ和學者とまといへは覘見て飯を喫するやう覺え居る者少からぬ。今之を發兌して遲滞なく奇抜此道には熱心吾身を忘るゝ人あるは余輩の最も歡喜する所なり。又之を發兌して遲滞なく購讀者に便を與ふる長島書籍店は日一日其實高の増加して先生の精神の擴張を計らんと望むなり。

牧野吉彌先生編 (訂正再版)

教科試験問題答案

賣價金四拾錢○郵税金四錢

本書は小學教育に従事せんとするものをして一般に教育に關する理法を會得せしめ専ら受験に應ずるの準備を得せしめ傍ら實地業を執るもの、参考書たらしめんことを期するの主題を以て發刊するものなり
本書分つて三篇とす第一篇を教育學第二篇を管理法第三編を授業法とす問題百六十四題を掲げ一々之が答案を施し學者をして容易に解答を附せしむるの要に備へたるものなり

發行所

東京日本橋區大傳馬町二丁目

牧野吉彌先生編 (再版)

倫理科試験問題答案

賣價金三十六錢○郵税金四錢

本書發刊の趣意は吾人の行爲を規定し人類の生道を教へ人の人たる所以の目的を達せしめんとするをして一般論理に關する理法を會得せしめ専ら西洋論理受験に應ずるの準備を得せしむるにあり問題七十六を掲げ一々丁寧よ之か答案を附記したり

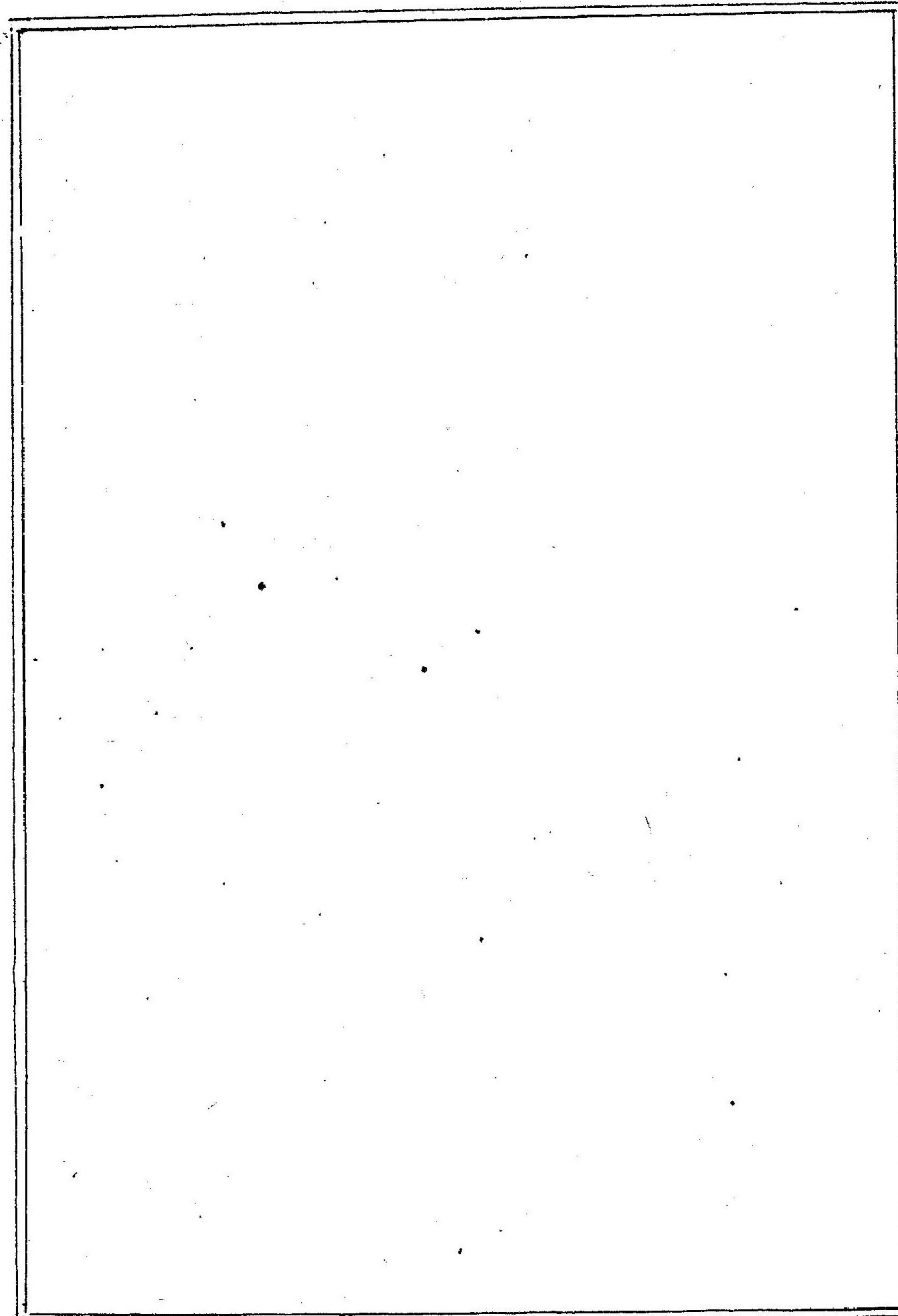
文昌堂

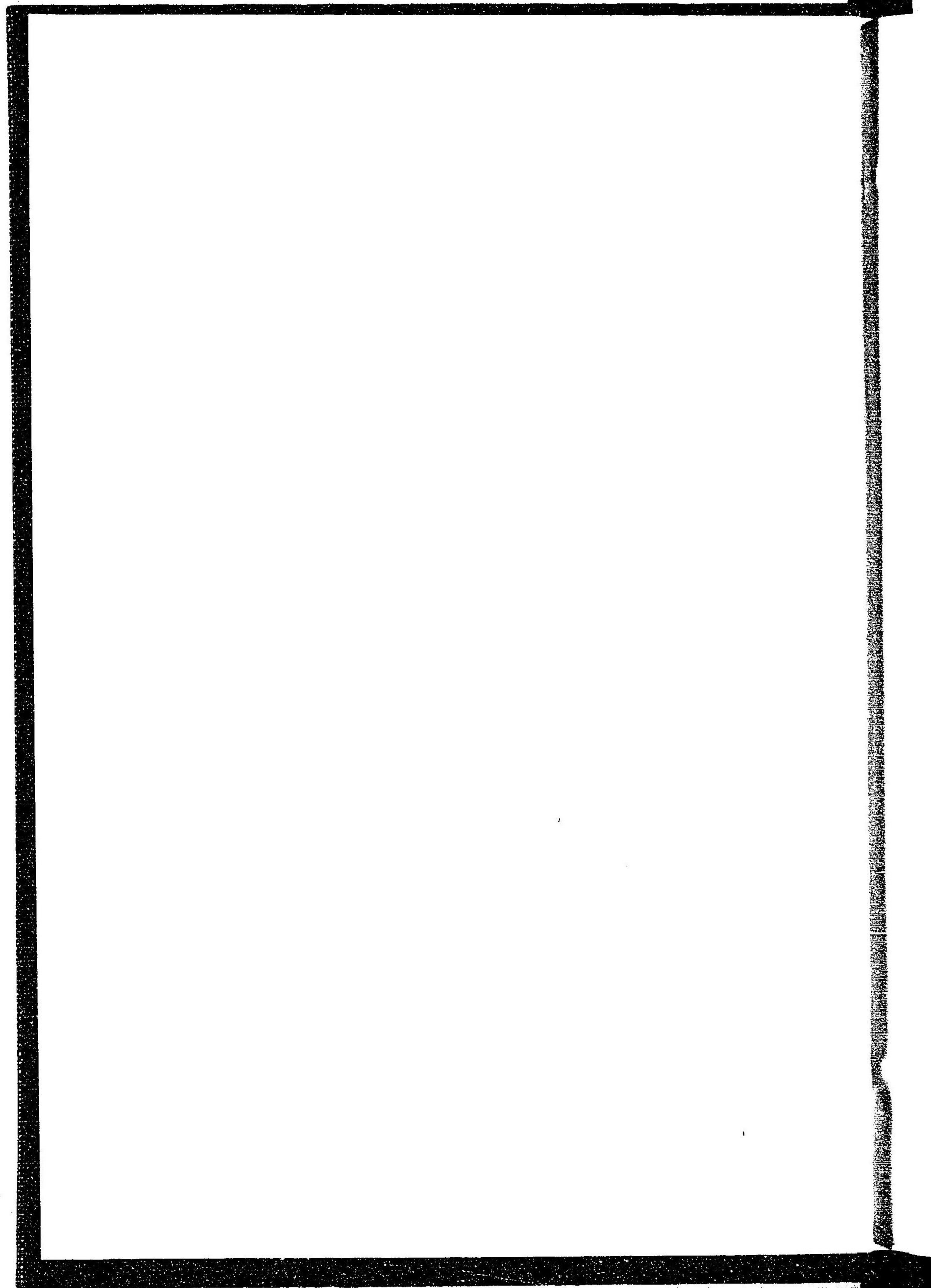
長嶋恭三郎

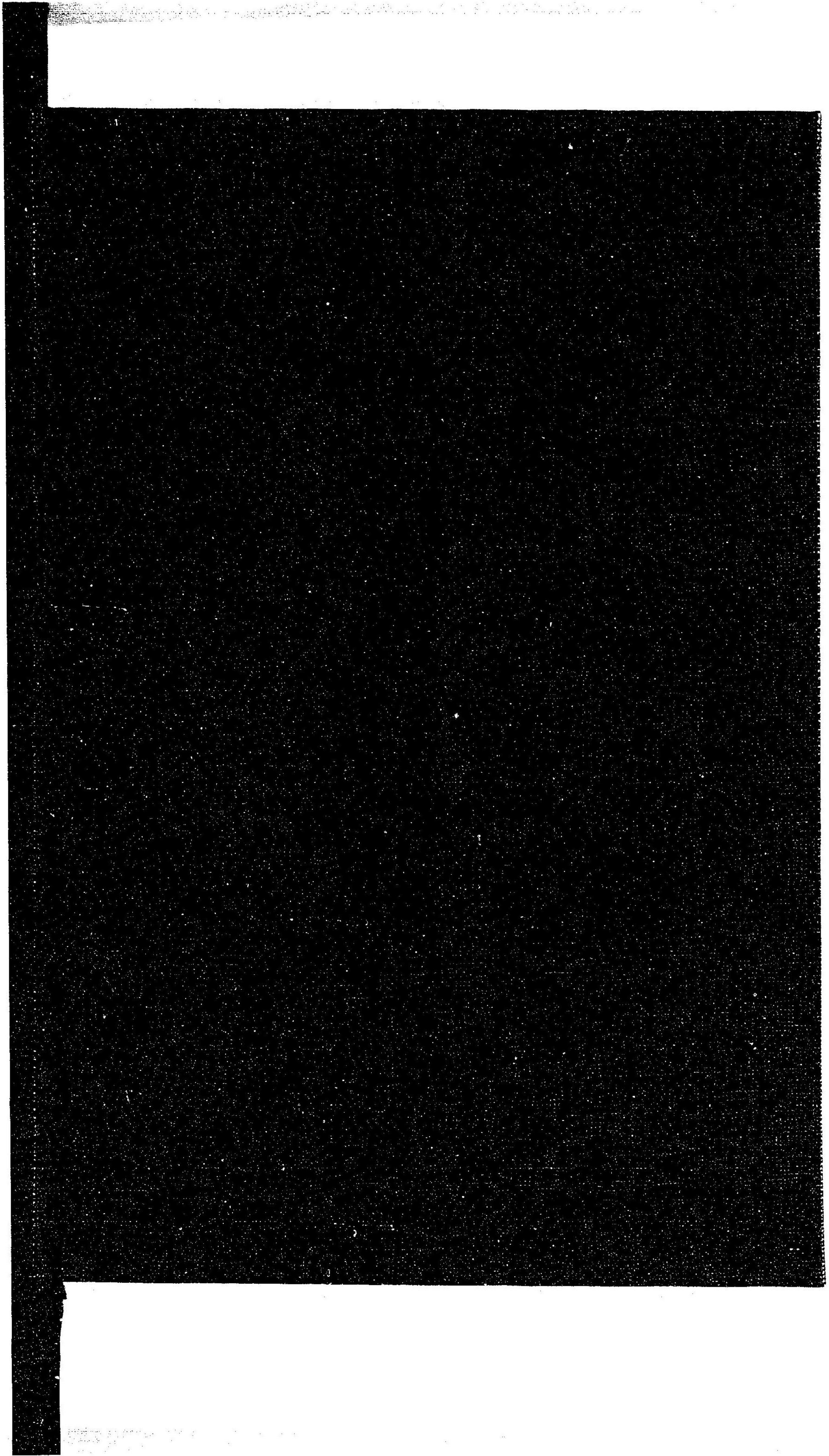
明治廿七年六月十八日
全 年十月廿八日合本

講述者 林 堯 臣

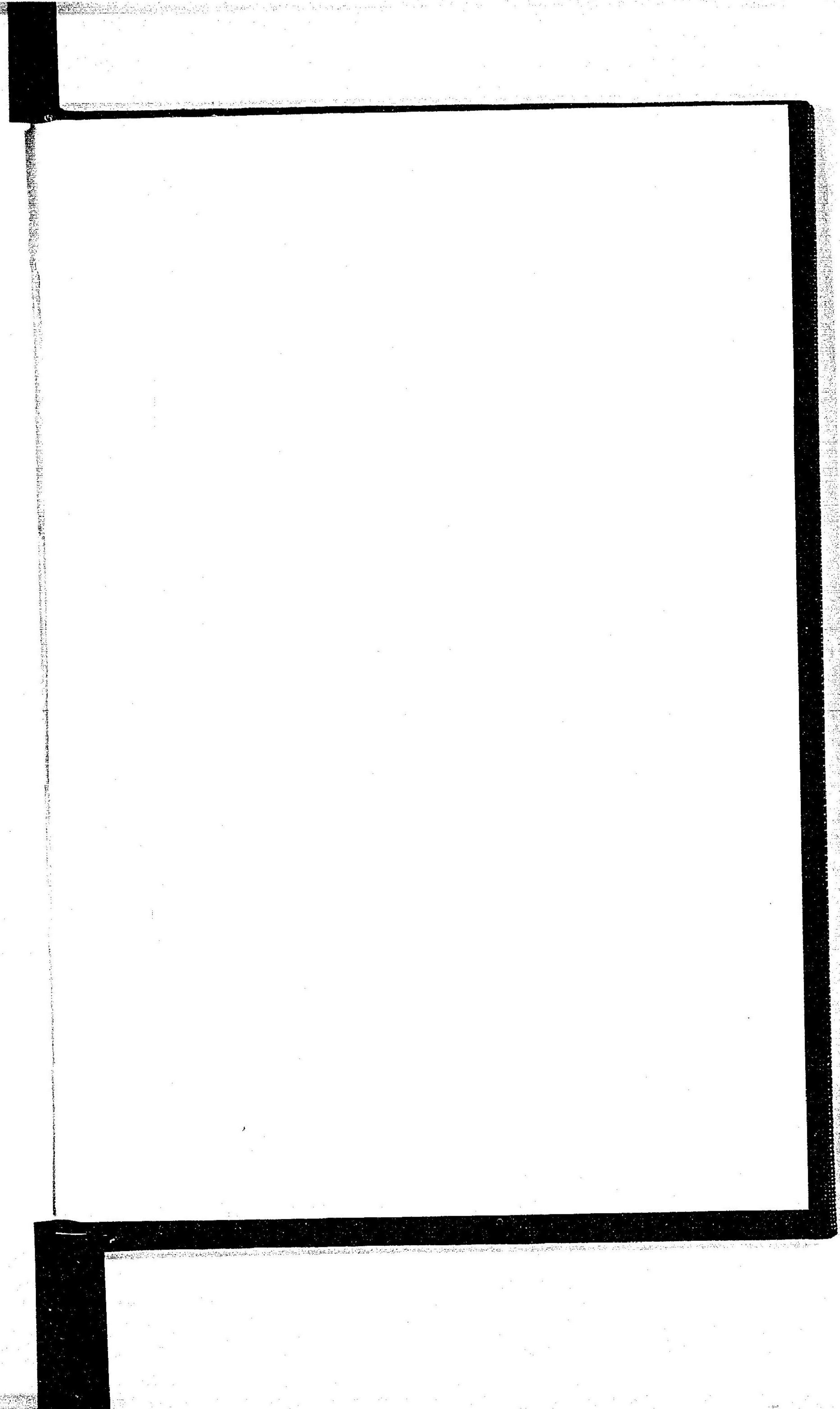
2192-33







815
H384n



2792-33

2792-33